寅さんの社会学

竹原　弘

はじめに

本稿は「映画『男はつらいよ』の哲学的分析」『徳山大学論叢第四十八号』と、「映画『男はつらいよ』の社会学的分析」『徳山大学総合経済研究所紀要第二十号』の続編である。今まで述べた事の概略を理解していただくために、目次だけをここに挙げておく。

「映画『男はつらいよ』の哲学的分析」では、Ⅰ「男はつらいよ」の一般的特徴　Ⅱ 意味について　Ⅲ 相互主観性について　Ⅳ「柴又慕情」での相互理解の破綻の分析

「映画『男はつらいよ』の社会学的分析」では、Ⅰ 主観性の社会学的根拠　Ⅱ 社会についての定義 (1)　Ⅲ 役割の相互理解　Ⅳ 交換システムとしての社会〈社会についての定義 (2)〉

本稿では、そうした今までの記述を踏まえて、交換システムを介さない行為、つまり非合理的行為について分析する。すなわち、恋愛的行為とそれ以外の非合理的行為について分析する。予定では、もっと多くの事柄について述べるつもりであったのだが、この非合理的行為が「男はつらいよ」の主題の如きものであるが故に、このテーマに多くの紙面を割いてしまった。

二

本稿の構成は、Ⅰ 交換システム外での人間の行為　Ⅱ 交換システム外での人間の行為　Ⅱ　となっている。

Ⅰ　交換システム外での人間の行為

社会の定義について既に、社会とは①意味の集合態である、②行為連関である、③交換システムである、と言った三種の定義がなされた。すなわち、社会を最も抽象的に定義すれば、社会とは意味の集合態である、と言う事になり、それに基づいてより具体的に定義すれば、行為連関と言う事になる。そしてそれをさらに具体化すれば、社会の基本的な仕組みは交換システムである、と言う事になる。

それでは人間の全ての社会的行為は交換システムを介して為されるのであろうか？　あるいは人間の全ての社会的行為を交換システムと言う社会的装置でもって説明出来るであろうか？　交換システムを介した行為とは、言い換えるならば、合理的行為の事を意味する。例えば主婦が、銀行の自分の口座に有る金がそれほど多くなくても、カードで色々と高価な品物を買い漁る場合に、彼女の生活全体と言う観点から見れば非常に非合理的な行為だと見做されるであろうし、そんなことを続けていたならば、いずれ彼女の家庭の財政は破綻を来すであろうことは、火を見るよりも明らかである。しかし、彼女がカードを使って買物をすると言う行為のみに目を向ければ、彼女はカードを介して品物の代金をちゃんと支払っているのだから、その行為は交換システムを媒介とした行為であるから、合理的行為であると言える。

ところが、人間の社会的行為の全てが交換システムを媒介とした合理的行為であるとは言えない行為も有る。周知の如く映画「男はつらいよ」の中では、主人公の寅次郎は色々な女性に恋をするのであるが、この恋愛行為は交換システムを媒介としない行為である。しかし、それはやはり社会的行為であり、非社会的行為ではない。

そこで交換システムを介さない社会的行為として、まず恋愛行為について考えてみよう。「男はつらいよ」シリーズの全四十八作には色々な恋愛が描かれているのであるが、まずシリーズの出発点である第一作を例にとって、考察してみよう。第一作で描かれている寅次郎の恋愛行為が、言わばシリーズ全体の典型的なパターンを為しており、後の作品はその様々なヴァリエイションであると言っても過言ではないだろう。

寅次郎の早とちりのために破綻しかけたさくらと博の恋は目出度く結婚へゴールインする。二人が新婚旅行へ行っている間、寅次郎は帝釈天の御前様の娘である冬子の所へ入り浸りになる。少し長いが、その部分を脚本から引用してみよう。

題経寺・縁側

寅、冬子の前に神妙な顔でうなだれている。

寅　「いるときゃア何だか騒々しくて口うるさい妹だと思ってましたが、いなくなって見ますと、何と言いますか、家ん中から火が消えたとでも言いますかねえ……」

冬子　「そうでしょうねえ、判るわ……特に寅ちゃんにはたった一人の肉親ですものねえ」

寅　「そういう訳なんで」

冬子　「少しやせたんじゃないかしら」

寅　「ええ……一貫目程」

冬子　「まァ……そういや顔色も悪いわ」

寅　「余り飯も食ってねえもんで」

冬子　「いけないわ、そんな、病気になるわよ」

三

寅、ゴホンゴホンと咳をして見せる。

冬子　「大丈夫」

寅　「何の、これしき」

冬子　「ね、寅ちゃん」

寅　「へ？」

冬子　「よかったら、うさ晴らしにどこかへ遊びに行きましょうか」

寅　「……？」

冬子　「何だか私もクサクサしているの、ね、いきましょうよ」

オートレース場

けたたましい爆音を響かせて走り廻るオートバイの群れ！

スタンドの一隅、群集にもまれながら冬子、そのそばに寅。

冬子、顔を紅潮させ、興奮して何やら叫んでいる。

冬子　「五番、五番、あ、すごい、五番ぬいた、寅ちゃん、五番、強いわよ、頑張れ！」

船橋あたりの横丁

寅につれられて、物珍しげにキョロキョロしながらやって来る冬子。

風体の悪い競輪帰りらしいのが、ジロジロ冬子を見るが、冬子は全く平気である。

冬子　「ね、私がおごってあげる、二千円もとったのよ」

寅　「でも、きたねえ店だから……」
冬子　「いいじゃないの、連れてって」

小さな焼鳥屋
狭い店中に人が一杯つまって、汗ダクでホルモンや焼鳥を食っている。
店のおかみが寅と冬子の前に焼鳥を置く。
寅　「お嬢さん、あったかいうちに食べなさいよ、うまいんだから」
冬子、おそるおそる焼鳥を口に運ぶ。
寅　「どう？　うまいでしょ」
冬子　「おいしいわ」
寅、嬉しそうに笑う。
寅　「そりゃあうまいわけだ。猫のはらわただもん。いつだってこの婆ァ猫しめてんだからな」
おかみ「違いますよ！」
寅　「ダメだよ、ネタあがってんだよ」
寅、もてあそんでいた生ピーマンを丸ごとかじる。
冬子、びっくりして大声をあげて笑い出す。

焼鳥屋の表（夜）
押し合いヘシ合い並んだ呑み屋横丁に有線の演歌が流れる。

五

〜殺したいほど
惚れて——

夜更けの帝釈天参道
冬子の歌声が近づいて来る。
〜殺したいほど——
惚れて——
寅が良い気持で歌いながら歩く冬子をシーッと制する。

冬子　「何よ、歌ったっていいじゃないの、口笛は幼き頃のわが友よ、吹きたくなれば吹きて遊びき」
冬子、再び歌いはじめる。

寅　「お嬢さん……みんなもう寝てるんですから」
参道の両側の家から、ソッと窓をあけてうかがう人影が見える。

冬子　「それじゃ、私たちも帰ってやすみましょうか、じゃ寅ちゃん、さようなら」
寺の門前で寅に手を差し出す。
寅、思い切って握手する。

冬子　「(ニッコリ笑って) おやすみなさい」

寅　「(ゾクッとふるえて) おやすみ、なさい」
物陰からじっとのぞいている源さん。冬子、庫裡の方へ歩いてゆきながら、寅に手を振って歌う。
〜殺しいたほど——

六

惚れてはいたが――

呆然と月光の下で見送る寅。

銀鈴を振るような冬子の美しい歌声が、森の精のように闇に消えてゆく。

寅、神妙な顔でペコリと頭を下げて引き返し始めるが、次第に表情がゆるみやがてその口から朗々と歌が流れ出す。

〜殺したいほど惚れてはいたが
指もふれずに別れたぜ
浪花節だと笑うておくれ
野暮な情けに頼るより
俺は仁義に生きて行く――

夜の、店も殆ど閉まった参道を、寅、踊るような足取りで歌声よ響けとばかり唄いながら歩いてゆく。

二、三の商店のしまったガラス戸から驚いたような顔がのぞいている。

「とらや」店

寅、唄いながら踊るように入ってくる。

階段を踏み外したり、顔をぶっつけたりしながら上機嫌で二階へ上がって行く。

座敷でその様子を竜造とつねが呆れて見ている。

竜造　「馬鹿だね、全く」

七

題経寺・境内

ジリジリ照りつける暑さに人影もない真昼の境内に、麦ワラ帽子を二つかぶり、釣竿を二本、魚籠を二つもった寅がイソイソと鼻唄でやって来て、寺の山門をくぐってくる。

日泰が水まきをする寺男の傍にいる。

寅　「やァ、御前様、こんにちわ」

日泰　「……」

寅　「暑いですね、毎日、じゃ、ちょいと通らせて貰います、今日はちょいとお嬢さんと魚釣にね」

と言いながら庭へ行く。

×　×

鼻唄を唄いながら庭に入った寅、ギョッと立ち止まる。

日陰になった縁先に冬子が来客らしい品の良い紳士と茶を呑んでいる。

冬子　「あら……（気づく）」

寅　「あ、お客さんですか」

冬子　「ごめんなさい、今日お約束してたんだわね」

寅　「いえ、いいんですいいんです、またその内に……どうも、失礼しました」

冬子　「ごめんなさいね」

寅、ペコペコ頭を下げて出てゆきながら入って来た日泰とすれ違う。

日泰　「帰るのか」

寅　「へえ（小声で）どういう御親戚ですかい」
日泰　「うむ……これから親戚になる男だ」
寅　「……？」
日泰　「つまり冬子の婿にな、あれにもいろいろ苦労させたがいい相手が見つかってよかった。……まだ人には言うなよ」
小声で言い捨てて庫裡の方へゆく。

境内

寅、釣竿をかついだまま、帰って来た浦島太郎のようにフラフラと出て来る。水をうっていた源さん、その様子を見ながら小声で調子はずれの歌をうたい出す。

〽殺したいほど惚れてはいたが
指もふれずに――

水元公園

一人釣り糸を垂れている寅、鼻水をすすりあげる。
寅の声「お嬢さん、お笑い下さいまし。あたくしは死ぬほどお嬢さんに惚れていたんでございます」
（『男はつらいよI』筑摩文庫）

記念すべき第一作での寅次郎の失恋劇は以上の様な具合で終わる。第一作での寅次郎の恋愛の相手は、寅次郎の幼

九

なじみであり、とらやの言わば近所の帝釈天に住んでいる、御前様の娘の冬子である。第二作以降の作品に見られる寅次郎の一方的な恋と失恋の原型がここにある。

この第一作での各場面の分析に入る前に、恋愛行為、あるいは行為としての恋愛についての一般的な定義を為そう。恋愛の目的は恋愛の相手との社会的な距離を取りのぞき、相手と一体となることを目指す事であると言える。一般的な人間相互の社会的関わりの場合には、自分と相手との間に常に何らかの距離が保たれている。どんなに親しい間柄の友人同士であっても、そこには互いに何らかの遠慮が有り、互いに自分以外の人間に入りこんでほしくない側面を持っている。そのように互いの間に何らかの距離を保っていることによって、むしろ友人関係が保たれ得ると言える。

まして職場での相互の社会的な関わりの場合には、相手との間には、自分の役割を遂行するための関わりしか必要としないのであって、互いにそれ以上に相手の私的な世界に踏み込むことをしない方が自らの役割を遂行するために有利である場合が多い。

ところが恋愛的行為の場合には、そうした一般的な社会的関係に有る距離を取りのぞいて、互いの間の距離を取りのぞく事を目指す。実際にそうしたことが可能かどうかは別として、誰かに恋をすると言う事は、相手との間に有る様々な隔たりを取りのぞいて、相手と一体となることを目指す。そうした相互行為は常に交換システムの外で為される事が多い。あるいは交換システムの中で、つまり職場の恋愛の様に、システムに媒介されて作られた諸々の人間関係に基づく場合でも、恋愛的相互行為、恋愛的行為連関は、そうした交換システムを越える事を目指す。つまり、交換システムに媒介されて出来た相互の関係を乗り越えて、そうした相互の関係には無い関係を形成して行く事を目指す。

恋愛行為が目指すのは恋愛の相手、つまり或る特定の他者との一体感であるが、従って交換システムによって形成された人間相互の関係性を乗り越える事であるが、しかし既に述べた様に、社会は基本的には交換システムによって

形成されているが故に、そうした恋愛的行為も交換システムを前提として、それを基盤にしての行為であるはずである。つまり、既存の社会的な装置としての交換システムに何らかの形で関わる事なしの行為は存在しない。例えば、恋愛の相手と何処かで逢う場合にも、そこに行くためには電車か地下鉄等の何らかの交通媒体を使用することによってのみ可能である。電車や地下鉄等は、それらが社会の中に組み込まれる事によって、都市の交通媒体であると言う事はそれ自身が交換システムとして人間の様々な社会的行為を可能にしている事を意味する。

あるいは自家用車を使用することによって、恋愛の相手と何処かでデートをする場合でも、その自家用車はやはり交換システムとしての何らかの社会的装置を媒介とするのでなければ、それを自分の所有物とすることは出来ない。

この様に、社会の基本的な仕組みとしての交換システムによって形成された人間的関係の乗り越えを目指す行為としての恋愛的行為は、何らかの形で交換システムを媒介にせざるを得ない。その様に恋愛的行為は交換システムを常に媒介することによって、交換システムを乗り越える事を目指すのである。

さらに交換システムの中で形成される諸々の役割は、常に交換システムによって規定される。既に述べた様に、法要としての交換システムは、一人一人の人間の役割を法要を行なう聖職者と、その聖職者が属している寺の檀家の人々とに分節する。また、コンビニエンスストアーやデパート等は、そこで働く従業員と客とに役割を分節する交換システムである。

恋愛的行為はそのような交換システムが形成する諸々の役割を越える事を目指す。例えば企業内での恋愛行為の場合には、上司と部下と言う役割から出発するとしても、そうした交換システムによって媒介された役割を越えたより親密な人間関係を形成する事を目指す。

恋人同士の関係は相互に恋愛の対象としての関係であり、そこには交換システムによって形成された関係は払拭されている。交換システムによって形成された諸々の人間関係は、交換システムを媒介にして形成された役割関係であ

一一

り、交換システムと言う役割システムの中での関係でしかなく、そこには常に相手との間には何らかの隔たりが存在しているのであり、その隔たりは交換システムの中での相互の役割関係が作り上げる。相互の恋愛関係は、そうした役割関係から出発しても、その役割関係を越える関係を形成することを目指す。

それ故に、交換システムによって規定された人間関係は、そこに属する諸々の人間の行為を全体としての交換システムに規制されるが故に、交換システムと言う全体が個に先行する。つまりその場合には、個々人の様々な行為は交換システムが生み出すのであり、諸々の社会的行為は、交換システムの中に還元される。すなわち、交換システムによって生み出された行為は、交換システムをそれとして維持し、発展させることを目指すが故に、それらの行為は交換システムの中に還元されるのである。

それに対して、交換システムを越える事を目指す行為は、個から出発することによって、自らの行為を何らかの形で規制する交換システムの外に出る事を試みる。恋愛行為は、その行為の動機を交換システム内に求めないで、個々人の中に求める。つまり恋愛行為は個にその起源を持ち、個の行為を生み出し、個の行為を規制する交換システムを越えた行為を目指す。すなわち交換システムが生み出す人間相互の連関が持つ関係性を越えて、交換システムに還元され得ない絆を形成することが、個に由来する行為の特徴である。それは恋愛的な人間関係にのみ言えることではないけれど、つまり友人関係とか麻雀仲間などにもそうしたことは言えるが、そうした関係は恋愛的行為の場合の様な親密さは無いであろう。

さらに恋愛的行為の場合にも、交換システムに基づく行為と同様に、行為連関が形成されて、そうした行為連関の維持によって恋愛的相互行為も保たれるのである。つまり失恋と言う事態は、そうした恋愛的行為連関が途絶えることを意味する。恋愛的人間関係は、そうした関係を維持することに対して相互承認が前提となっているが故に、一方がそうした関係を維持することを拒否するならば、そこに行為連関が破綻することが生ずる。

以上述べた恋愛的行為についての一般的な定義に基づいて、先に引用した「男はつらいよ」の第一作のシーンを分析してみよう。

寅次郎と冬子の関係は幼なじみであり、また幼なじみに多い、住居が近いと言う事に基づく関係である。だから、二人の人間関係は交換システムに基づいて形成されたのではないと言える。先に引用したシーンは、さくらと博の結婚式が終わった後、寅次郎は冬子に呼ばれて帝釈天に遊びに行き、冬子と話をしている場面から始まる。

寅次郎は既に冬子に惚れており、冬子の前で寅次郎はわざと咳をしたりして、寅次郎らしからぬ仕草をする。冬子はそんな寅次郎を慮ってか、寅次郎を遊びに誘う。

その次の場面では、二人がオートレース場でオートレースを見物している。そしてその後二人は船橋に有る飲み屋街を彷徨し、一軒の薄汚い焼鳥屋に入り、寅次郎は冬子に焼き鳥を食べさせて、冬子が美味しいと言うと、それは猫のはらわただと言って、冬子をからかう。

こうした二人の相互行為には、先に分析した「柴又慕情」（「映画『男はつらいよ』の哲学的分析」『徳山大学論叢第四十八号』一九九七年十二月参照）と同様に、相互理解の不一致が有る。すなわち寅次郎は冬子に惚れているが故に、寅次郎は冬子との間に親密な関係性を維持しようとしている。彼等の人間関係の形成は、先にも述べた様に、幼なじみであり、住まいが近所であると言う、言わばテニエスの言うゲマインシャフト的な関係性に由来するが、しかし交換システム的要素が全く無いとは言えない。つまりとらやは当然帝釈天（正式には題経寺）の檀家であり、従って「映画『男はつらいよ』の社会学的分析」の中で述べた檀家と寺との関係は交換システムに組み込まれた関係であり、法要の場は交換システムの場であると言う事からするならば、彼等の間には交換システムが介在している、と言えないでもない。

従って、寅次郎は冬子との間に、そうした社会的な仕組みによって結び付けられ、あるいはそれによって互いの間

に有る隔たりを無くす様な関係を冬子との間に築こうと寅次郎は努力するのである。つまり、寺と檀家との間に介在する交換システムが彼等を結びつけ、また彼等の関係に或る距離を介在させているのであるが、冬子に誘われた寅次郎は、そうした距離を無くして、冬子と自分との間にもっと親密な関係、すなわち恋人の様な関係を構築しようとする努力が、冬子をオートレース場に連れていったり、船橋の焼き鳥屋へ連れていったりすることとして現われるのである。

そしてその夜、冬子は寅次郎と別れ際に、寅次郎に手を出して握手するのであるが、そのことによって寅次郎はすっかり舞い上がってしまい、夜の参道を演歌を歌いながら踊る様にして家路を急ぐ。

別れ際での握手を冬子はその日一日、寅次郎に色々と見慣れない場所に連れて行って貰った事の礼の様なものとしてしか思っていなかったのであるが、寅次郎は冬子と握手することが、二人を隔てている距離を縮める事の象徴と捉えたのである。そこに二人の間の相互理解の破綻が見られるのであり、それは前に「柴又慕情」を分析した時と同じ事である。ところが、「柴又慕情」では、寅次郎は旅先でヒロインの歌子に出会うのであるが、従って寅次郎と歌子との間には、最初から関係は無かったし、また二人の間に介在する交換システムに基づく距離も無かった。つまり旅先での出会いが二人を結びつけ、またそれと同時に二人の間に何らかの距離を介在させたのである。寅次郎と歌子との間に介在する距離は、出会ってからの時間の身近さに由来するものであって、二人の間に介在する交換システムに由来する距離ではない。だから寅次郎が歌子との間の関係性を形成する関係の距離を縮める事はそれほど困難ではなかった。つまり寅次郎が歌子と逢う回数を多くすれば良かっただけである。それは交換システムの介在が形成する人間関係の距離を縮めるよりも容易である。

ところが、寅次郎と冬子の間には檀家と寺との間の関係が介在しており、その関係性が作り出す距離は遠い。つまり寅次郎は冬子との間に介在する交換システムを越える間柄を形成しなければならなかったのである。寅次郎が冬子

をオートレース場や船橋の焼き鳥屋へと連れていく行為の中には既にそうした交換システムを越える行為があった。寅次郎にとって、冬子との間に恋愛的関係性を形成するためには、後少しの努力をすれば良かった様に思われたのであろう。

しかし冬子の方は自分の寺の檀家に属する人間であり、また定職らしいものを持たない寅次郎を最初から自分の恋愛の対象とは見ていなかった。冬子にとって寅次郎は、憂さ晴らしをするための相手でしかなかったのである。二人の間には既に相互理解の破綻が生じていたのである。そして寅次郎がその相互理解の破綻を自覚するのはそれほど先の事ではなくて、それから何日かして、寅次郎が冬子と釣りに行く約束をして、寅次郎は約束通りに冬子の所に行くが、そこで冬子が誰か寅次郎の知らない男と一緒に歓談しているのを目撃する。寅次郎は遠慮して帰ろうとするが、帰りぎわに御前様に会い、あの知らない男は誰かを聞き、その男が冬子の婚約者であることを知り、愕然とする。そこで寅次郎は冬子と自分との間に相互理解の破綻が有った事を自覚するのである。

これがシリーズ最初の寅次郎の失恋劇であり、寅次郎の失恋劇はここから始まる。ただし、山田洋次監督は四十八作と言う長いシリーズの間で同じパターンを避けて、寅次郎の失恋にも様々なヴァリエイションをもって描く。

それでは失恋とはどのような事態であろうか。先に恋愛的行為について不充分ながらも定義したのであるが、それに基づいて失恋と言う事態についての社会学的な定義を試みよう。人間の社会的行為は意味への行為によって、自己の欲求を充足させる事であり、それは行為連関として、自己の行為に対して他者の行為が連動する事へと繋がる。

恋愛的行為はまさに行為連関であり、自己による相手への行為に対して、相手は自己への行為を連動させることによって、相互の恋愛的絆を維持しているのである。ここでは、冬子が寅次郎を遊びに誘い、寅次郎は冬子の誘いに乗って、冬子が今まであまり縁の無かった所へ連れて行く、と言う形で相互の行為が連関している。しかし、それが恋愛的行為であると思っているのは寅次郎の方だけであり、冬子は自分が寅次郎と恋愛的相互行為を為しているとは全

一五

く思っていなかったのであるが。

そして、ある日寅次郎は冬子に婚約者が居る事を知り、自分と冬子が為していた行為連関は恋愛的な行為連関ではなかった事を知るのである。すなわち、そこで二人の間に存続していた行為連関は途絶えて、寅次郎の失恋劇が始まり、そして終わるのである。すなわち失恋とは、恋愛的行為連関が途絶える事態を意味するのであり、それは恋愛関係の有った二人のどちらかが、行為連関を一方的に中止することによって生ずるのである。

この場合について言えば、最初から恋愛的行為連関は存在しなかったのであり、寅次郎が一方的に冬子と一緒に何処かへ行く事によって自分は冬子と恋愛的行為を為していると思い込んでいるだけなのである。寅次郎はそれを自覚することによって、冬子との行為連関を中止して、旅に出る。寅次郎が旅に出ると言う事は、冬子との間に寅次郎が行なっていた恋愛的相互行為を断ち切る事を意味する。その恋愛的行為は、寅次郎の一方的な恋愛的行為であり、つまり寅次郎のみが恋愛的行為を為していたのであり、冬子の方はただ寅次郎と一緒に、今までの冬子の生活環境の中では経験出来なかった様な事を見聞きする面白さを満喫するだけの行為を為していたにすぎないのであるが。

こうした行為連関を恋愛的行為と言い得るかどうかは疑問である。恋愛的行為とは、互いに各々が相互理解をすることによって成り立つものであり、この場合は、そうした相互理解は全く成立しておらず、寅次郎の主観の中にのみ恋愛が有ったのであり、言わば寅次郎の一人相撲であったと言える。恋愛的行為は互いに相手の方を向いて、相手と一体になろうとする行為であるが、この場合には、寅次郎のみが冬子の方に向かい、冬子は寅次郎の方ではなくて、寅次郎に連れていってもらった色々な、冬子にとって珍しい光景の方に目を奪われていたのである。だから、寅次郎と冬子との間には恋愛的行為はなかったと言う事が出来る。

もし冬子も寅次郎の方を向いていたならば、彼等がオートレース場に行ったり、船橋の飲み屋街を彷徨する行為も全てが恋愛的行為であった。何故ならば、そうした行為を二人で為す事によって、二人は互いに一体感を得ようとす

るからである。

そして、寅次郎が冬子と釣りに行く約束をして、寅次郎が冬子を訪れ、そこで冬子とその婚約者を目撃して、寅次郎は冬子との相互的行為を断ち切るのであるが、それは恋愛的行為が排他的であるからである。そのことについてジンメルから引用してみよう。

「すなわち関係の感情的な構造がその本質的なものを、各人が他のだれでもなくたんにこの唯一の他者のみにあたえたり示したりするものにもとづかせるやいなや――ただちに独特の色調があたえられ、人びとはこれを親密性と名づける。この親密性の基礎となっているのは関係の内容ではない。個人的・排他的な内容と他の方向にも拡散する内容との混合にかんしては、二つの関係がまったく同じであるかもしれないが、この両関係のうち親密なのは、個人的・排他的な内容が関係の担い手もしくは枢軸としてあらわれるもののみである。」（ジンメル『社会学』）

恋愛的行為、恋愛的関係の場合には、第三者がその関係性の中に介入出来ない関係性を構築することを目指しているが故に、もしそこに第三者がいたならば、その関係は破綻する。この場合寅次郎は、冬子と自分との間に第三者が介入している事を知り、そしてその第三者こそが冬子にとって、親密な関係を築くべき相手であることを知って、冬子との相互行為を断ち切るのである。

恋愛的相互行為が途絶える理由として、相互行為の間に第三者が居る事による場合が「男はつらいよ」シリーズにも、第一作以外に有る。例えば第二作の「続・男はつらいよ」。寅次郎の幼い頃の英語の先生である坪内散歩に出会った寅次郎は、その娘の夏子に惚れる。そして寅次郎が散歩先生の家でご馳走になっている時に、寅次郎は急に腹が痛くなり、救急車を呼んで入院する。そこで若い医局員の藤村に出会う。それから色々有った後、散歩先生は急死する。そして葬儀の時。

一七

坪内家

黒枠の散歩の写真。

その前に蒲焼と酒の徳利が供えてある。

喪服で座っている夏子。居並ぶ親戚、隣近所の人達。

読経の声、そして玄関の方から何やら叫ぶ寅の声が聞こえる。

玄関

受付には紋付姿の寅が異様なまでの緊張を見せて源吉に何やら指図している。そばに控える竜造。

寅　「――そこ、出るまでに全部のけるようにしておけよ。ガラッと玄関をあけたらあの、皆でもってパーッと塩まくから、清めるねえ、いいかい、一人や二人じゃねえんだから、ちっとばかりじゃだめだよ、うんとね、じゃ頼むよ――」

手伝いの女に――

寅　「これ返しておいてくれ、――こっち終わったら、お茶な」

女　「はい」

寅　「――源！　何ボケッとしてるんだよ。このヤロー、こうやってる間、靴ぜんぶ揃えろていったろ、とっがえんな――」

梅太郎がバイクでやって来る。

梅太郎「いゃァ遅くなっちまって、出がけに税務署の野郎が来やがって何だかんだと……寅さん、今日は大変だねえ、ええ」

寅　「（表情をくずさず）遠路はるばるご苦労様です」
梅太郎「はァ？」
寅　「どうぞ、御記帳を」
梅太郎「へえ」
寅　「おすみになりましたらどうぞ、あちらで御焼香を」
梅太郎「へえ、へえ」
　あわてて記帳する。

次の間
　さくら、近所の人に茶を入れている。
　つね、赤ん坊を抱いた博のそばに梅太郎が座り込む。
梅太郎「どうだい寅さんの張り切りようは」
さくら「大変でしょ」
つね　「今朝は五時起きだよ、ここに来てもまア段取りのいいこと、あの人一人で何もかもやってるんだから」
梅太郎「こういう時には便利な男だね」
　そこに寅が入って来て室内を見回し、曲がった花など直しながら格好よくつねの方へ来る。
寅　「おばちゃんよ、葬儀屋の大将に一本つけてやってくれや」
つね「はいよ」
　寅、再び忙しそうに玄関の方へ。

一九

玄関

寅、戻って来る。

寅　「さて……と、あれはいい、あれはいい……そうか、火葬場への祝儀忘れたな」

などと言っているところへ藤村が来て立つ。

寅　「（顔を見る）……」

藤村　「車さんでしたね、どうもこの度は」

寅　「なんだあんたか。市民病院の先生だろう。いや、これは義理堅いことで、さア、御記帳を……しかしよく判ったね先生……そうかい、来てくれたのかい、さ、どうぞ、どうぞ」

自分から案内して庭の方へゆく。

居間

夏子、じっとうつむいている。

寅が来て小声で囁く。

寅　「お嬢さん……珍しい人が来ましたよ」

夏子、ふり向くと藤村がいる。

夏子の表情にふと緊張のゆるみが見える。

藤村、黙って会釈する。

寅　「憶えてますか、ホラ、俺が入院した時に世話になった先生、名前……えーと」

藤村　「（困りながら）藤村です」

寅　「そうそう、藤村先生」
　夏子、激しい当惑におそわれ、顔を伏せる。
寅　「さ、どうぞ、どうぞ」
　寅、忙しげに引込む。
　藤村、気を取直して棺の前に進む。
　夏子、つと立上がって席をはずす。

夏子の部屋
　居間の家具などがゴタゴタ置かれた室内。
　夏子、入って来てピアノに寄りかかり、溜息をつく。
　藤村が入って来る。
　夏子、ふり返る。
藤村　「学会をどうしてもぬけ出せなくて……遅くなってごめん」
　夏子、その胸に倒れかかるように顔をうずめる。
藤村　「……結局、僕のことは……」
夏子　「(首を横にふる) 言ったわ、三日前に……それとなく」
藤村　「そうしたら?」
夏子　「お前がえらんだ男なら……何も言わんて……ちょっと淋しそうな顔でね」
　藤村の胸に涙をこぼす――その時、寅がドアを開ける。

二一

二人、すっと身体を離すところへ寅が顔を出し、並んだ二人を見て一瞬ポカンとする。二人とも言葉の出しようもなく、気まずく黙っている。

寅　「お嬢さん」

夏子　「はい」

寅、必死に何か言おうと努力する。

そしてうわずったような声でようやく言う。

寅　「出棺……あの……出棺の……時間が……」

夏子　「どうもありがとう」

寅　「いいえ」

寅、フワフワと出てゆく。

（脚本集『男はつらいよI』）

ここでも寅次郎の夏子への一方的な恋が藤村と言うインテリの介在によって破れる。つまり失恋とは、二人の間に第三者が介入したり、あるいは第三者が介入する余地が出来る事であり、そのことによって二人の相互行為が断絶する事態である。

交換システムによって生み出される様々な行為の場合には、第三者の介入によって或る行為が途絶えると言う事は無い。むしろ二人よりも三人四人の方が交換システムによって贈与された行為がはかどる場合が多い。また、交換システム外での行為の場合、例えば酒を飲んだり、麻雀をすると言う様な行為の場合も、第三者がそこに介入することによって、その行為連関が妨げられると言う様な事は生じない。

それでは何故、恋愛的行為の場合だけ、第三者がその行為連関の中に介入すると、その行為連関が破綻するか、あるいは破綻しなくてもそれを続行することが困難になるのであろうか。

それについては様々な角度から説明出来るであろうが、社会学的な観点から説明するならば、恋愛と言う関係性は、あるいは恋愛と言う行為連関は既に述べた様に、その行為や関係性自体が交換システム的な行為連関を乗り越え様とする行為であるが、しかしそこには交換システムによって分節される役割と同様に独自な役割に分節される場面が開かれるのである。すなわち恋愛行為連関が開ける独自な場面の中で分節される役割は、男と女と言う独自な役割のみであり、そこに第三者が介在するとその場面自体が破壊されてしまう様な独自な役割構造が築かれるのである。恋愛的行為連関が切り開く場面は、別に密室でなければならないと言う事は無い。それは何処かの公園であっても好いし、映画館の中でも良いが、つまりそこに第三者が居てもかまわないのであるが、そこで第三者は、一対の男女の恋愛的行為連関の中に入り込む事は出来ない。

すなわち恋愛的行為連関は何処でもその独自な場面を切り開くのであるが、それは一対の男女が目指す一体感への行為にとっての場面であり、その行為のただ中においては、男と女と言う役割のみがその行為へと参画出来る如き役割構造を持っているのである。従って、物理的な空間に第三者が居てもその役割構造は破壊されないが、二人が目指す一体感へと向かう行為連関の中に第三者が入り込んで、共にその行為連関を遂行する事は出来ない。つまり、或る男が二人の間に入り込んで、その女との一体感を目指す場合には、三角関係と言う事態になり、二人の男の間にはその女性を巡ってコンフリクトが生ずる。

そうした場合には、どちらかの男がその女性との一体感をあきらめなければならないのである。第一作でも、第二作でも、寅次郎はその第三者になり、恋愛的行為連関への参画を断念せざるを得なかったのである。

恋愛的行為連関についての別の映画のシーンを紹介して、恋愛的行為連関についてさらに深めよう。第五作目の

「望郷篇」で、マドンナは長山藍子。

柴又に久しぶりに帰って来た寅次郎はまた一騒動を起こす。それが一軒落着した後、登がとらやに来て、札幌のまさ吉親分が死にかけていて、寅次郎に逢いたがっている、と言う報せを持って来る。二人はすぐ札幌に行きまさ吉に逢うが、まさ吉はもう虫の息で一人息子に逢いたいと言う。二人は小樽に居るまさ吉の息子に逢いに行くが、機関車の釜焚きをしている息子は逢いたくないと言う。仕方なく寅次郎は札幌に帰るが、まさ吉がもう死んでいた。寅次郎は額に汗して働く事が大事だと知り、柴又に帰って、仕事を探すが、何処も寅次郎を雇うと言う店は無い。自棄になった寅次郎はボートの中で寝ている間に、ボートが岸から離れて、江戸川を流れる。

暫らくたって、とらやに寅次郎から油揚げが送られる。それを見て、さくらは寅次郎が浦安で働いていることを知り、訪ねる。寅次郎は浦安の豆腐屋で働いていた。その店には節子と言う若い女性とその母親が居る。節子とその母親は寅次郎が店で働いてくれるのを喜んでいるが、さくらは心配する。

その夜、源吉に説教をしていると、寅次郎が寝泊りしている部屋に節子が来る。

「寅さん、まだ起きてたの」と節子が言うと、「こう暑くちゃあ寝られないよ」と答える。

「そっちに行っていい」と節子は遠慮しながら言う。

「いいよ」と寅次郎は返事する。

節子はもじもじして、何か話しにくそうにしているので、寅次郎は「どうかしたかい」と聞く。

節子は「ちょっとね、母さんと喧嘩しちゃったの」と言って、寅次郎の横に座る。

そしてハンカチで涙を拭く。

そして空を見上げて、「まあ、綺麗なお月さま」と呟く。

「そうだねえ、天に軌道の有る如く、人それぞれに運命と言うものを持っております」と呟く様に言う。

節子は笑いながら、「何？」と聞く。
「三で死んだは三島のおせん、おせんばかりが女じゃないよ。白く咲いたは百合の花、四角四面は豆腐屋の娘、色は白いが水臭い。四谷、赤坂、麹町、ちょろちょろ流れる御茶ノ水、粋なねえちゃん立ちしょんべん」
それを聞いて節子は笑う。
「寅さん、昔何してたの」
「まあ、色々さ」
「苦労したんでしょうねえ」
「まあ、馬鹿な苦労よ」
「どうして結婚しなかったの？」
「まあ、色々あったしな」
「ねえ、寅さん。出来たらよ、もし出来たら、ずっと内の店に居てもらえないかしら」
それを聞いて、寅次郎はびっくりする。
「だめ？」と節子は寅次郎の顔を見る。
「いや、いいよ、俺はずうっとそのつもりだったし、昔から豆腐は大好きだからなあ」
「ほんと！」と節子は喜ぶ。そして「よかった、よかったわ。これで安心出来るわ」と呟く。
そして「じゃあね、寅さん、お休みなさい」と立ち上がり、帰って行く。
隠れていた源吉がのそのそと出て来て、「兄貴、おめでとうございます。今のプロポーズやなあ」と言う。
「馬鹿野郎、手前なんかに判るかい、そんなこと」と寅次郎は照れる。
次の日寅次郎は朝からはりきって仕事に精を出す。そしてさくらに、ここで所帯を持つ様になるかもしれない、と

二五

電話する。さくらは不安な顔をする。

夜、豆腐屋の女将と節子は、寅次郎が店にずっと居てくれるお祝いに、とご馳走を作ってくれる。

寅次郎は派手なアロハシャツを着たので、二人は「素敵！」と言う。

「ちょっと派手気味じゃないかと思ったんですけど、ほかに着るものがねえもんですから」と照れながら座る。

節子は寅次郎にビールをつぐ。そして皆で乾杯する。

そこへいつも豆腐を買いに来る青年がやってくる。

「あれ、あの声はほれ、豆腐気違いの工員じゃあねえか」

青年は部屋に入って来て、「今晩わ、どうも夜分お邪魔して」と挨拶する。手に西瓜を持っている。

「今時分来たって豆腐なんか売らないよ」と寅次郎が言うと、青年は「いや、違うんです、これ買って来たんです」と手に持っている西瓜を見せる。

「とにかく上がったら。ビールでも飲んでいきなよ」と女将がすすめる。

「そうよ、遠慮することはないよ、ささ、上がれ上がれ、ええ、普段お前豆腐に醤油ぶっかけたもの食ってるんだろ。たまには人並みにこういうお食事しろよ。せっちゃん、いいんだろ、これ上げても」

「ええ、じゃあ、上がったら」と節子は遠慮げに言う。

「そうですか、じゃ、ちょっと」と言って、上がる。

「この野郎、嬉しそうなつらしやがって」と言いながら、寅次郎は青年にビールをつぐ。

そして「せっちゃん、この前ここに来た妹の亭主ね、それと感じがよく似てるんだよ。まるでそっくりだよ。だからね、俺、どうもこれを見るとね、他人の様な気がしないんだよ。あれかい、やっぱり印刷工場の職工かなんかやってんのかよ、ん、かまぼこ屋か？」

と寅次郎が言うと、「いえ、国鉄です」と答える。
「ええ？」と寅次郎が聞き返すと、女将が「この人ねえ、国鉄の機関士なんだよ」と口を挟む。
「釜焚きかぁ」
「ええ、三年前までは蒸気機関車に乗っていましたけどねえ、今はディーゼルです」
すると寅次郎は感心して、「機関士かぁ！　はーあ、偉いねえ、ありゃあ大変な仕事だよ。おらあ見なおしちゃったなあ。ああ、そうでありましたか、さ、どんどん飲みなよ。どんどん食ったほうがいいんだよ。なんだよ、機関士が豆腐食ってっちゃあ駄目だよ。もっと力つけなくっちゃあ」
すると横から節子が、「あのね、この寅さんがね、ずっと内の店手伝ってくれることになったのよ」と言う。
すると青年が「ほーう、そうですか、そりゃあ都合がよかったなあ、どうぞよろしくお願いします」と言う。
寅次郎は照れるが、ふと気が付いて、「どうしてお前、俺によろしく言うの？　あれ、女将さん、こいつ親戚かなんかになってんの」と聞く。
女将は言いにくそうに、「まあ、これから親戚になるんだけどね」と言うと、
「これからって言うと、どういう意味で」
女将は困った顔をして、娘の方を見て、「お前から肝腎の事を寅さんに説明しなくっちゃ」と言う。
節子が照れて言いにくそうにしていると、寅次郎は変な顔をする。
すると青年が「実はねえ、寅さん、僕今度高崎機関区へ転勤になるんですよ。それで前から結婚のことについては節子さんと話しあってきたんだけれど、節子さんには節子さんの家の事情が有る、母さん一人、店に残しては店はやっていけない。母さんはどうしても店をつぶしたくない。ま、そんなことで長引いていたんだけれど、今度の転勤を機会にどうしても結婚したくって、それで節子さんもようやく決心してくれて、それが今聞いたら寅さんが店をやっ

二七

てくれる、それなら母さんも助かるし、好都合だなって、それで僕もほっとしてる訳なんですけどね」
すると寅次郎は「何も知らなかったからねえ、せっちゃんも教えてくれなかったし、三枚目みたいだよ、僕は」と笑いながらそう言う。
「ああ、後免よ、失礼しちゃったよねえ、でも私、店つぶすの嫌だったからね、ずうっと反対してたもんで、言いにくかったんだよ」と女将。
「いいんだ、いいんだ、そういう事は。本当におめでとう」
「ありがとう」と青年。
「ねえ、寅さん、本当にずうっと居てくれる、この店に」と節子が言う。
「ええ、ずうっと居てくれますよ。心配ありませんよ」
「そのうち私が好い人みつけてやるからね、寅さん」と女将。
「そうねえ、誰か好い人を一人見繕って」
「どんなタイプが良いんだい、寅さんは？」
「そうねえ、やっぱり女将さんみたいな人がいいなあ」
寅次郎の言葉に皆大笑いする。
次の日、節子が源吉の所へ来て、「寅さんは」と聞く。
源吉は「朝、早う、何処かへ行ってしまいました」
「どうして」
「知りまへん。わいが代わりに豆腐屋さんで働け言われました。よろしくお願いします」と源吉は頭を下げる。
夏祭りの夜、とらやではおじちゃんがさくら達を待っている。

「遅いなあ、さくら達、何をしてやんだろなあ、もう。早くいかねえと終わっちゃうぞ、もう」
「大丈夫だよう、落ち着かない人だねえ。今始まったばっかりじゃないか」
そこへさくらが満男を抱いて来る。
「ああ、来た、来た、来た」とおばちゃんがさくらから満男を受け取る。
「早くそうめん食べちまいなよ。遅くなると仕掛けが見られないよ、ささ、早く」
博とさくらは座ってそうめんを食べ始める。
博が「来る道、話してたんですけど、兄さん呼べばよかったですねえ」と言うと、おじちゃんが、「寅か？　何だか俺、今日明日あたり振られて帰って来る様な気がしてならねえんだよ」
「昨日、さくらの所に電話してきて、元気だったそうですよ、な」と博が言うと、さくらは「うん」と相づちを打つ。
「じゃあまだ大丈夫なのか」
そこへ電話がかかってきて、おばちゃんが出る。
「あら、まあ、これはこれは。あのわたくし寅の伯母でございます。このたびはすっかり寅がお世話になって。はあ？　寅がいなくなった？　いいえ、私どもには。まあ、ご心配をおかけしてすみません。へえ、こっちへ来ましたらね、さっそくお知らせしますから。どうもすみません、後免なさい」と受話器を置いて、
「大変だよ、寅ちゃん、いなくなっちゃったんだってさ、やっぱり振られたんだよ。馬鹿だねえ」そこへ寅次郎が姿を現わす。おばちゃんはまだ気がつかない。
さくらの様子が変なので後を振り向くと、そこに寅次郎が居るので、おばちゃんはびっくりして腰を抜かす。
皆はびっくりして寅次郎を見る。寅次郎はにこにこ笑いながら、入って来る。

二九

「げ、げ、元気かい？」とおじちゃんがたどたどしく言う。
「まあな」と言いながら、寅次郎は上がり框に腰をかける。
「今夜は花火大会ですよ」と博がその場を取り繕う様に言う。
「そうだってな、満男も見に行くのか」
さくらが心配そうに「お兄ちゃん、もうお店やめちゃったの」と聞く。
「豆腐屋のほう？　やめちゃったよ」と寅次郎はにこにこしながら言う。
さくらは心配そうに寅次郎の顔を見る。
そこへタコ社長（梅太郎）が来る。
「まだ行かなかったのかい、あっ、寅さん」と寅次郎に気付いて、
「珍しいねえ、花火見物かい」と近寄る。
「なんだい、嬉しそうな顔しちゃってさ。連れてこなかったのかい」
「誰を？」
「これだよう」と小指を出す。
「聞いてるよ、うまくやってるそうじゃないかよう、浦安あたりでさあ。色男、ははは」と笑う。
寅次郎は笑いながら、平手でいきなりタコ社長の鼻を押す。
タコ社長は悲鳴を上げる。
そして「何するんだこの野郎」と寅次郎に向かって行こうとするが、おじちゃんと博がそれを止める。
「冗談じゃねえぞう、お前。お前とはもう本当に付き合いたくねえや」とおじちゃん。
「だいたい社長は無神経すぎますよ。寅さんの顔が笑ってる顔かどうかぐらい分からなかったんですか？」と博も

三〇

怒る。

「笑ってたじゃねえか」

「笑える場合か、お前。寅は振られたんだぞ」とおじちゃんが言うと、社長は、

「ええ、またか！」と大声を出す。

博が社長の口に手を当てて、口を封じる。

その時、寅次郎は鞄を持って出て行く。さくらが後を追う。

「お兄ちゃん」と声をかけて寅次郎に近付く。

「また行っちゃうの」

「やっぱり地道な暮らしは無理だったよ、さくら」と寅次郎は振り向いて言う。

「うん」とさくらはうなずく。

「俺、むかしから馬鹿だったもんな。だけどよう、さくら、あんちゃんはよう、今度だけは地道に暮らせると思っていたよ、本気でよ。やっぱり駄目だよな。お前幸せにくらせよ」

と言って、寅次郎は立ち去る。

「お兄ちゃん」とさくらは呼び止めるが、寅次郎はそれを振り切る様に立ち去る。

この「望郷篇」の場合でも、やはり寅次郎は豆腐屋の娘の節子（長山藍子）に惚れて、そして失恋する。その点では第一作、第二作と同じパターンである。寅次郎が惚れた女性には既に恋人が居て、寅次郎の知らない所でその男性との間で恋愛的行為連関が進んでいて、寅次郎はそうした恋愛的行為連関の外に居たのだが、寅次郎自身もそのことを最後になるまで知らなかった訳で、最後は悲劇に終わる。

つまり寅次郎が勝手に恋愛的行為連関を形成していると思っていたが、実はそうではなかったと言うパターンは前

三一

二作と同様である。しかし、「望郷篇」の場合には、寅次郎が一方的に思っている恋愛的行為連関には、前二作よりも、より具体性が有る。第一作の場合には、寅次郎の（思い込んでいる）恋愛的行為連関の相関者は帝釈天の御前様の娘であり、従って寅次郎の頭の中には、冬子との恋愛の行き着く先は何なのかと言う事についての具体的なイメージは持っていなかった。つまり、彼の冬子との行為連関には方向付けがなく、ただ恋愛のための恋愛と言った様な物であった。

そして第二作も、相手は寅次郎の恩師の娘であり、この場合も寅次郎が思っている恋愛の方向は不透明であった。ところが、この「望郷篇」の場合は、テーマが地道な労働、額に汗をして地道に地味にひたすら努力する事の美学であり、寅次郎は浦安の豆腐屋で地道に額に汗をして、ひたすら働く。それがかつての寅次郎の親分の死に面して寅次郎が学んだ教訓であった。派手ではあるがいい加減な生き方の行き着く先はどのようなものであるか、また地道に働く事がどれほど尊いものであるか、と言う事を、寅次郎はまさ吉親分の死と、その息子との出会いを通して学んだ訳である。

そして、寅次郎は希望通りに額に汗して、地道に働く場所を見いだして、そこで生まれ変わった様に真面目に働くのであるが、彼の惚れっぽさが災いして、失恋と共に地道な生活からも別れを告げて、さくらとの悲しい別れが有って、物語は終わる。

従ってこの物語では寅次郎は、彼が見いだした地道に労働する場としての浦安の豆腐屋の一人娘である節子と所帯を持ち、豆腐屋の後継ぎになることを夢見ていた訳であり、単なる恋愛遊戯ではなくて、恋愛が行き着く先の具体的な基盤についてのイメージが寅次郎には有ったのである。

寅次郎が見いだした汗水たらして地道に働く場としての豆腐屋は、言わば交換システムであり、寅次郎は豆腐を作り、近所の人々に売ることによって、豆腐屋と言う交換システムに内属して、その交換システムを機能されることに

貢献する。従って寅次郎はその限りにおいて合理的な行為連関を形成しているのである。そして一方では、そこの一人娘である節子に惚れて、節子と所帯を持ち、彼が働いている豆腐屋の後を継ぐ事を夢見ているのである。寅次郎のこの二律背反的な行為はどのような意味が有るのであろうか。

寅次郎が豆腐屋で豆腐を作り、それを近所の主婦達に売ると言う行為は、小規模ではあるが、豆腐屋と言う交換システムに帰属しての、豆腐屋の従業員と言う役割の遂行であり、それは交換システムを媒介とした行為であると言う意味で、合理的な行為であると言える。それに対して、そこの一人娘の節子に恋心を抱いていると言う事との間には、どのような関係性が有るのであろうか。

先の、ビデオから起こした「望郷篇」からの引用にも有る様に、或る日寅次郎は節子から、ずうっとこの店に居て欲しいと頼まれるのであるが、寅次郎はその節子の言葉を彼女の寅次郎へのプロポーズであると勝手に解釈して、喜ぶ。そして、仕事にもますます精を出す。この場合に、寅次郎の行為は交換システムを媒介とした行為連関、つまり豆腐を作り、売ると言う行為連関と、節子との恋愛的行為連関と言う交換システムを超える行為連関とが矛盾なく連動している所に特徴が有る。

こうした事は別に珍しい事ではなくて、職場恋愛にはよく有る事である。しかし、この場合には寅次郎は交換システムとしての豆腐屋の従業員としての自らの役割の遂行と、その豆腐屋の娘との恋愛的行為連関の遂行と言う二重の行為連関を、為そうとしているのである。既に述べた様に、恋愛的行為連関は、交換システムがそれに内属している個としての人間に贈与する行為ではなくて、個としての人間に由来する行為であり、それは交換システムが媒介する人間相互の行為連関を乗り越える事を目指す。ところが、この「望郷篇」の場合に寅次郎が置かれた状況は少し違っていて、豆腐屋の娘である節子との間の恋愛的行為連関の遂行と、豆腐屋と言う交換システムに内属すると言う事は両立する事態であり、節子との間の恋愛的行為連関の成就が、即豆腐屋と言う交換システムの獲得となる状況に置か

れていると寅次郎は考えていた。つまり、その場合の寅次郎の行為連関は、交換システムでの自らの役割、すなわち豆腐を作り、それを売ると言う役割の遂行と、豆腐屋の娘である節子との恋愛的行為連関の成就が二律背反的な行為連関ではなくて、両立する行為連関であると、彼は考えていた。すなわち恋愛的行為連関は、彼にとって交換システムによって与えられた人間関係の乗り越えではなくて、交換システムによって与えられた役割の遂行の恒常性の獲得である、と思っていたのである。

ところが、寅次郎の期待に反して、節子とその母親が寅次郎に望んでいたのは、豆腐屋と言う交換システムへの内属の恒常性のみであり、つまり親子は寅次郎に豆腐屋の仕事をずうっと続けて欲しかったのであり、節子の恋愛的行為連関の相手は外に居たのである。すなわち、寅次郎が望んでいた二律背反的な行為連関の両立は瓦解して、それと共に寅次郎はもう一方の役割をも捨てて、節子との間の行為連関を断絶させるために旅に出る。

先に述べた様に、恋愛的行為連関は独自な空間を開き、そこでは男と女と言う役割のみ存在して、第三者が介在することを許容しない。寅次郎はここでもそうした恋愛的行為連関が作り出す空間からはじき出されて、それと共に豆腐屋と言う交換システムでの役割を放棄する。つまり、北海道でのまさ吉親分の死と、その息子との出会いによって得た教訓は生かされずに終わったのである。

節子とその母親が寅次郎に望んだ、豆腐屋と言う交換システムの維持、そこでの役割の遂行と言う事は、同時にそこへの婿養子に入ると言う事が現代の社会的慣習なのであり、従って寅次郎も、節子から、ずっと店を手伝って欲しい、と言われた時に、節子との恋愛的行為連関の成就をも期待していたのである。つまり、先に述べた交換システムでの役割の遂行と、その交換システムに属する女性の獲得と言う事、つまり恋愛的行為連関とは両立させるのが、社会の通念であり、だから寅次郎も節子から、ずっと店を手伝って欲しいと言われた時に、節子の自分へのプロポーズであると勘違いしたのである。

すなわち、理論的には二律背反的な行為である交換システムでの役割の遂行と言う事と、交換システムを超える行為連関としての恋愛的行為連関は、現実には両立させるのが社会的な通念であり、そこに理論と現実との間の乖離が有る。理論的に言えば、非合理的行為としての恋愛的行為連関は交換システムを超える親密さを目指す行為であるが、その意味で交換システムに内属することによって、それによって与えられる行為連関と、交換システムから超出しようとする恋愛的行為連関とは二律背反的な関係に有るのであるが、現実的には両者は両立し得る。つまり、この場合には経済活動である交換システムによって与えられた役割の遂行と、一応は豆腐屋と言う交換システムに媒介された恋愛的行為連関での役割の遂行とは、理論的には前者は交換システムを介した行為として合理的行為であり、後者は交換システムの外において、そして交換システムによって構築された関係性を乗り越える関係性の構築を目指す行為であるが故に、異なる種類の行為連関であるが、現実的には両者は両立し得るのである。すなわち、現実の社会はその様な相異なる種類の行為を結合させる事が出来るほどの複雑性を持っているのである。

次に恋愛的行為連関の規則性について考えるために、第三十五作目の「寅次郎恋愛塾」を手がかりにしたい。同業者のポンシュ（関敬六）と一緒に長崎の五島列島に行った寅次郎は、そこで一人の老婆を助け、それが縁で老婆の家に世話になるが、その夜老婆は急死する。老婆の葬儀の日に老婆の孫の江上若菜（樋口可南子）と会う。東京に帰った寅次郎は若菜の住んでいるアパートを訪れるが、そのアパートの一階に住んでおり、司法試験の勉強をしている青年酒田民夫（平田満）が若菜のことが好きだと知った寅次郎は義侠心を出して二人を結びつけ様として、民夫を呼び出して恋愛の指南をする。

民夫は寅次郎に呼ばれて近くの寺の境内に来る。

「何ですか、大事な用って」と民夫は既に来ている寅次郎に聞く。

寅次郎は以前に民夫の部屋に行った時に、民夫から取り上げた若菜の写真を民夫に返す。

「この写真返すためにこんな所にわざわざ呼んだんですか？」と民夫。
「お前、若菜ちゃんに惚れてんだろう」
「何でそんな事聞くんですか？」
「若菜ちゃんに惚れてるんじゃねえのか」
「僕が一方的に想っているだけですから別に」
「惚れてるか惚れてないかどっちなんだよう」と寅次郎は声を荒げる。
「はい、惚れてます」
「よし、そうと決まったら勝負に出よう」
と言って、寅次郎は民夫を突き飛ばす。民夫はよろける。
「今度の日曜日、俺がお前と三人で映画にでも行こうとあの子を誘う」
「僕と寅さんと若菜さんとで、ですか？」
「そうよ、当日、俺がにわかの腹痛、行けない。お前とあの子が二人でデートする」
「僕はそんたな人を騙す様な事は出来ません、法曹を目指す人間として」と民夫が言うと、寅次郎は、
「さいなら」と言って帰ろうとする。
「ちょっと待って下さい」と民夫は寅次郎を呼び止める。
「俺はなあ、お前の幸せを願ってここまでわざわざ足をはこんだんだぞ。それはお前は秀才かも知れない。法律の事はこんなに知っているかもしれない。しかし、こと色恋の道にかけては、俺の前でお前はくちばしの黄色いひよこも同然だよ」
「それは認めます」

「だったら俺の言う事を黙って聞け」
「はい」
二人は腰をかける。
「二人になった。お前とあの子は、まあ、映画でも見るか」
「はい」
「お前、いきなり手を握ったりするなよ」
「はい」
「映画の後はレストランで晩ご飯だな。これは出来るだけ楽しい雰囲気にしなければいけない。お前、間違っても偉そうに法律の話なんかしちゃ駄目だぞ、ええ。と言っても黙ってばっかりいても駄目だ。喋り過ぎず、黙り過ぎず。出来ればあの子に喋ってもらって、お前はにこにこして、その話を聞いてあげる」
「はい」と言って、民夫はポケットからペンを出してメモをする。
「その後、公園で散歩か。あの子の足取りに合わせて出来るだけゆっくり歩いてやれよ。雨に濡れた木の葉が街灯の光にきらきらきらきら輝いている。な、梅雨時だから。またすぐ雨が降って来るかも知れない。『お、またぽつぽつ降って来ましたね。帰ろうか』」
「降らなかった場合はどうするんですか」
「降らなかった場合は、馬鹿！　自分で考えろよ。俺はそういう気持ちの持ち方をお前に言ってるんだから」
「すみません」
「アパートへ帰る、あの子は別れ難い気持ちになっている。『よろしかったら私の部屋に寄って下さい』」
「いいえ、結構です」

三七

「馬鹿！　そういう時にそういう返事はしない。『ちょっと失礼をします』あの子は紅茶なんかを入れてくれる。お湯がじーんと沸くなあ。時折窓の外を雨が激しく打つ。もう、お前の言う言葉は一つ、『若菜さん、愛しています』」

「言えるかなあ、僕にそんなこと」

「細かい事は後で電話する。早く帰って勉強しろ」

「はい」と民夫はよろよろと帰る。

寅次郎は民夫の後ろ姿に向かって、

「金四郎、分かってるな、お前の人生はそこにかかっているんだぞ」

「ありがとうございました」と民夫は頭を下げて、帰って行く。

その後姿を見ながら寅次郎は深い溜息をつく。

民夫は寅次郎の指南通りに若菜とデートをして、予定通りに行くが、若菜の部屋で寝てしまう。その事を寅次郎に報告すると、寅次郎は怒って「死んでしまえ」と言う。

民夫は故郷の秋田へ帰って、死のうとする。若菜と寅次郎と民夫の大学の恩師は秋田に行き、民夫を助ける。

この「寅次郎恋愛塾」では、寅次郎が恋する青年に恋愛の作法を伝授する物語であり、その点では、先の第一作、第二作、それに「望郷篇」とは趣が少し違うが、寅次郎が恋する青年に恋愛の仕方を教える内容の作品はこの三十五作目までには有った。例えば、第二十作目の「寅次郎頑張れ！」とか、第三十作目の「花も嵐も寅次郎」などがそうである。

こうした作品では、寅次郎自身が恋愛するのではなくて、恋に悩む青年を助けて、青年が恋する相手と結びつける努力をする物語である。この「寅次郎恋愛塾」では、寅次郎はそれまでの恋愛と失恋の経験を踏まえて、恋をする青年、酒田民夫に恋愛の仕方を伝授する。寅次郎自身が何度も恋をするが、常に失敗しているのに他人に恋愛の仕方を

教えるのも変な話だが、とにかく最後には青年の恋は実る。

そしてここで問題になるのは、恋愛的行為連関の法則に関してである。寅次郎は恋する青年、酒田民夫に恋愛的行為連関が有する法則について伝授する。先の「寅次郎恋愛塾」からの引用にもあった通り、デートをする時に、まず映画を見て、それからレストランで食事をして、その後公園を散歩し、最後の仕上げとして、彼女に誘われるままに彼女の部屋に行く、と言った手順を踏む事を、寅次郎は民夫に教授する。さらにレストランでの食事の時には、法律の話の様な難しい話は避けて、相手の話を聞いてやり、黙り過ぎるのもいけないし、喋り過ぎるのものいけないと、寅次郎は青年に細々した事まで教える。

すなわち、恋愛的行為連関の遂行の場合に、その行為連関を貫く法則が有り、その法則を無視したら恋愛は成就しない、と寅次郎は青年に教えるのである。民夫は寅次郎の言う通りの行為連関を若菜と形成するのであるが、最後の仕上げの所で、つまり若菜の部屋で眠ってしまい、民夫はそれが取り返しの無い失敗であると思い、故郷の秋田に帰り、自殺をしようとするが、寅次郎達に助けられる。

寅次郎の言う恋愛的行為連関の法則は、勿論普遍的なものではなくて、時代により、また地域にもよって変化する。それは時代により、地域により、社会を構成している意味の集合態が異なるからである。既に述べた様に、行為の仕方は、行為を誘発する意味連関によって規定される。映画の無い時代には、デートをする場合に、映画を見に行く事は無理であるし、レストランの様なものが無い所では、デートの時にレストランで食事をする事も出来ない。つまり、そうした諸々の意味、あるいは意味を持つ物が有るか無いかによって行為の仕方は違って来るのであり、従って恋愛的行為連関の形も違って来るのである。つまり恋愛的行為連関の持つ法則の様なものが有るならば、それはその行為連関を遂行する行為主体が属している社会の形態によって規定されるのである。

既に述べた様に恋愛的行為は、社会の中軸を為している交換システムによって与えられた行為ではなくて、個に由

三九

来する行為であるが、しかしその行為連関を遂行する場合に、その行為連関が社会的行為である限り、それは交換システムを何らかの形で利用したり、それに基づかなければ社会的行為ではない。先の若菜と民夫のデートの場合も、映画を見たり、レストランで食事をしたりするが、それらは交換システムであり、代金を払って映画を見たり、食事をしたりするし、その場合にはそれらの交換システムによって客としての役割を与えられ、その役割を演ずる事を通して、恋愛的行為連関を遂行しているのである。そして、それらの交換システムの中で、それによって与えられた役割を演ずることによって恋愛的行為連関を遂行する場合には、寅次郎が青年に伝授した様に、役割の遂行の仕方が有る。つまり各々の交換システムの中で、その交換システムによって与えられた役割を演ずる場合に、その役割の演じ方が有り、その演じ方を間違えば、恋愛的行為連関は断絶してしまう。

その恋愛的行為連関は、個に由来した行為であり、交換システムによって与えられた行為ではないが、その行為を遂行する場合には、何らかの形で交換システムに基づいて行為を遂行する訳であり、その交換システムによって与えられた役割の遂行の場合に、その役割の遂行は、交換システムへと還元される行為ではなくて、恋愛の相手との相互的な行為の遂行であるから、その行為連関の形成は、二人の関係の親密さの形成であり、行為の遂行の一つ一つが恋愛行為の相関者との関係へと収斂する。つまり一つ一つの意味への行為は、意味が内属される交換システムを機能させることへと収斂するのではなくて、排他的な親密さの形成へと繋がって行くのである。

そしてそのためには、交換システムによって与えられた役割の演じ方が有るのであり、またどのような交換システムを選ぶか、あるいはどのような役割を演ずるか、についての法則が有る。寅次郎は映画館と言う交換システム、レストランと言う交換システムを選んだが、そうした交換システムの中に組み込まれて、それによって役割を与えられる、その仕方にも法則が有る。

それでは役割とは何であるか、と言う事についてさらに考えてみたい。

「役割諸類型型の構築が、行為の制度化と必然的な共通関係を持つ事が、容易に理解され得る。諸制度は、役割によって、個々の経験において、具体化される。言葉を用いて客観化された役割は、なんらかの社会の客観的に利用し得る世界の本質的な要素である。もろもろの役割を演ずることによって、個人は社会的世界に参加する。こうした諸々の役割を内面化することによって、その社会的世界は、その個人にとって、主観的に現実的なものとなる。

知識の共通な蓄積のうちには、社会のすべてのメンバーにとって、あるいは、少なくとも、問題の役割の潜在的な演技者である。そうした人々にとって、手に入れやすい、役割遂行の諸基準が存在する。この一般的な手に入れやすさは、それ自体、知識の同一の蓄積の部分である。役割Xの諸基準が一般的に知られているのみならず、こうした諸基準が知られているということが、知られている。」（バーガー、ルックマン『現実の社会的構成』）

既に役割について述べたのであるが、この場合には交換システムによって分節される役割についてであるが、その役割は恒常的なものではなくて、たまたま或る交換システムに関与する場合に、その交換システムによって分節されて、与えられる役割である。この先に引用した「寅次郎恋愛塾」の場合には、民夫が若菜とデートをする時に、映画を見たり、レストランで食事をしたりする場合に、映画館と言う交換システムに関わり、レストランと言う交換システムに関与するのであるが、その場合には、そうした交換システムによって、若菜達は客としての役割を与えられる。そして、その場合の客としての役割を与えられて、その役割を遂行する事は、その交換システムに貢献するためではなくて、彼女達の間に生ずる恋愛的行為連関の遂行によって、二人の間に親密さと言う空間を形成するためである。そのためにはどうすればいいかについて、寅次郎は民夫に様々な事を教授するのである。例えば、映画館の中で突然、若菜の手を握ったりしてはいけないとか、レストランで食事をする際には、喋り過ぎず、また黙っていても駄目だとか、細々とした事を寅次郎は民夫に言う。そうした事は、それらの交換システムによって与えられた客としての役割の遂行の際のその遂行の仕方についての指南である。

四一

「私が『一般化された社会的態度』(generalized social attitudes) と名づけたものがあり、それが、組織化された自我を可能にする。共同社会には、本質的には同じ情況のもとでとられる一定の動作の仕方があり、だれかがおこなうこの動作の仕方は、われわれが一定の行為にふみだすときに、他の人々のなかにわれわれが引き起こすものである。もし我々が我々の権利を主張すれば、まさにそれが権利であり、普遍的であるからこそ、我々はある明確な反応をもとめつつある。つまり、だれだって反応せざるをえないし、また多分反応するだろう、そういう反応である。さてこの反応は我々自身の性質のなかに存在し、我々は、他の誰にたいしても、その人が訴えるかぎり、ある程度同じ態度をとる準備が出来ている。我々が他人にこのような反応をよびおこすときには、我々は他人の態度をとることが出来るし、従って我々自身の行為を他人の反応に適応させることが出来る。このようにして、我々が生活している共同社会には、このような共通な反応の包括的な連鎖があり、このような反応を我々は『制度』(institutions) と呼んでいる。制度は、ある特定の情況に対する共同社会の全成員の側の共通した反応をあらわす。」(ミード『精神、自我、社会』)

このミードの言う一般化された社会的態度とは、或る状況の中では、人間は一般的に共通の行為の仕方をすると言う事であり、言い換えれば、社会を構成する様々な意味へと行為するその仕方は、誰でも共通のものが有ると言う事である。この場合には、映画館と言う意味所有態やレストランと言う意味所有態への、あるいはそこでの行為の仕方には一定の行為パターンが有り、映画館ではスクリーンに映っている映像を見、レストランでは運ばれた食事を食べると言う一般的な行為のパターンで、人々は行為する。それがこの場合、交換システムによって与えられた役割、つまり客として交換システムによって分節された役割の遂行の仕方である。

社会化された人間が社会的行為を為す場合、つまり諸々の意味へと行為する場合に、多様な状況の中でも、その行為の仕方は一定であり、共通性を持っているのである。そして、この場合には、恋愛的行為連関の遂行のために、民夫と若菜は映画を見、レストランで食事をするのであるが、それ故に、そうした諸々の交換システムによって分節さ

れた役割の遂行は、先に述べた様に、交換システムへとその行為を還元させるためにそうした行為を為しているのではない。そうした交換システムに内属している者であるならば、つまり映画館の従業員やレストランの従業員であるならば、交換システムが彼等に与えた役割の遂行は交換システムへと還元される行為、つまり交換システムの利益のための行為であるが、民夫や若菜の場合には、交換システムによって客として分節された訳であるから、つまり彼等は客として映画館やレストランへ行った訳であるから、彼等の行為連関は恋愛的行為連関であり、つまり男と女と言う役割の親密化を目指す行為であるから、彼等の行為連関は彼等自身の空間、あるいは彼等が男と女として構築しようとする親密さの深まりへと還元されるのである。

従って、そうした男女の親密さの構築のためには、幾つかの段階を踏まなければならないし、その各段階においての振る舞いにも一定の法則が有る。寅次郎はそれを民夫に教えたのである。そして仕上げとして、若菜は民夫を自分の部屋に誘う。これも寅次郎が予測した通りであった。しかし、民夫は前の晩に緊張のために一睡もしておらず、しかもレストランで五杯も水割りを飲んだので、すっかり眠くなり、若菜の部屋で眠ってしまう。つまり、幾つかの段階を踏んで辿り着くはずの最終段階で民夫は、若菜との親密な間柄の構築に失敗するのである。そのことを民夫は寅次郎に報告すると、寅次郎は「お前は若菜ちゃんに恥をかかせたから、死ね」と詰る。民夫はそれを真に受けて、故郷に帰って死のうとするが、若菜や寅次郎、それに民夫の大学の恩師に助けられて、めでたしとなる。

すなわち、映画を見たり、レストランで食事をしたり、公園で散歩をしたりすると言った、幾つかの段階を踏むことによって、男と女は排他的な親密さを構築することを試みる訳であるが、そのプロセスが恋愛的行為連関であり、その行為連関は交換システムを利用しながらも、その行為連関の効果は交換システムに還元されず、最終段階へと収斂するのである。

Ⅱ　交換システム外での人間の行為Ⅱ

交換システム外での社会的行為は恋愛的行為だけではない。「男はつらいよ」シリーズでは、それ以外の行為についても描かれている。私は交換システムに即した行為を合理的行為とし、交換システムの外の行為を非合理的行為とした。合理的、非合理的の基準を、ここでは交換システムに置いた訳である。何が合理的行為で、何が非合理的行為なのかについての明確な定義は色々有るだろうが、ここでは交換システムを一つの基準にして、交換システムに即した行為を合理的行為とし、交換システムの外にその行為の目指す所を置く行為を非合理的行為とする。すなわち社会的行為の場合に、社会の根幹を為す行為は利潤追求行為であり、現代社会の場合、特に日本を始めとする先進諸国の場合には、市場経済が社会の中枢を占めており、社会はそうした市場における利潤の追求を基盤として成り立っている。従って何らかの交換システムに帰属して、交換システムから与えられた役割の遂行が、利潤を生み出す行為であり、そうした行為を合理的行為とし、交換システムの外に行為の目的を置く行為を利潤追求的行為ではない行為であるとして、それを非合理的行為とする。つまり、交換システムを利用しつつ、しかもその行為連関の効果が最終的に交換システムへと還元されない行為連関を非合理的行為であるとし、その行為連関の効果が交換システムに還元される行為連関を合理的行為であるとするのである。

しかし、ここで注意してもらいたい事は、合理的行為、非合理的行為と言う表現から合理的行為が価値的に非合理的行為よりも上位に属すると言った価値観がこの表現の中に入っているのではない、と言う事である。ここで言う合理的、非合理的と言う事は社会的行為の中で、社会の仕組みの中枢に関わる行為か、それともその周辺に属する行為か、と言う、社会の構造に関わる問題の観点からの見方であり、従って行為そのものの価値に関しては、ウェーバー

の言う価値中立的な立場を取る。確かに合理的行為が非合理的行為よりも社会の構造の中枢に位置しているが故に、合理的行為の方が、社会の周辺に関わる非合理的行為よりも価値的に高いのではないか、と言う考えも出て来そうだが、社会学的に言えば、どちらも社会的行為であり、両者が相俟って社会が構成されているのであるから、両者は価値的には対等である。つまり、経済行為がそれ以外の行為よりも価値が高いと言う理由は無いし、今分析している「男はつらいよ」シリーズの場合を取っても、合理的行為よりも非合理的行為にウエイトが置かれている。と言うよりも、この物語の殆どは寅次郎を始めとする様々な人々の非合理的行為によって成り立っている。

先に述べた恋愛的行為連関は、行為連関の効果が交換システムに還元されない行為であるが故に、合理的行為ではないことになる。そして、「男はつらいよ」では、そうした恋愛的行為以外にも非合理的行為が描かれている。

まず以前にも取り上げた「寅次郎夕焼け小焼け」の後半部分を取り上げてみよう。

青観の絵をめぐって社長と喧嘩した寅次郎は旅に出て、兵庫県の龍野市で青観に偶然出会う。そして青観と共に行動しているうちに、宴会で芸者のぼたんと知合う。

それから暫らく経って上京したぼたんは寅次郎に、悪い男に二百万円もの金を騙し取られた事を告白して、今回の上京はその金を取り戻すためであると言う。しかし、ぼたんと一緒にその男の所へかけ合いに行ったタコ社長は、その男は法律に熟知しており、自分の財産をすべて妻や弟名義にしているので、裁判をやっても勝てないと言う。怒った寅次郎はその男を殺すと言って出掛けるが、途中でその男が住んでいる場所を聞いていなかった事を思い出して、途方に暮れる。そして青観の所へ行く。

「いやあ、暫らくだなあ。上がれ」と青観が中から出て来る。

「ここでいいや。先生にちょっと頼みが有って来たんだけど、聞いてくれるかなあ。絵描いてくれねえかな、絵。それもあのー、こないだみたいんじゃなくてねえ、こういうでっかい紙に、色使ったりしてさあ、あのー、丁寧に描

いてやってくれ、な。ということはさあ、ほら、あのー、この間龍野へ行った時に、あの、ぼたんと言う芸者が居たろう、先生忘れちゃったかなあ。こいつがね、大事に貯めた金をさあ、悪い奴に騙し取られちゃったんだよ。こまっちゃってなあ、なんとか助けてやろうと想ったけどさあ、俺には何にもしてやれねえもんなあ。それでね、先生に一発、絵描いてもらってね、この前、ちょろちょろと描いたって七万円だもんなあ。こんなでっかい紙でもってよう、丁寧に描くんだから、こらあ高く売れるよ。俺、それをぼたんに持たせて帰りてえんだ。なあ、先生、ちょろちょろと描いてくれよ。な、俺ここで待ってるから」

「そいつは出来ないよ。気の毒だけど」

「そんなこと言うなよ、先生。な、俺も最初からさあ、無理な頼みだと分かってて、ね、分かってて、お願いに来たんだからさあ。先生、一つ頼むよ」

青観は困った様に頭をかかえて、

「つまりねえ、僕が絵を描くってことは、これはねえ僕の仕事なんだ。金を稼ぐためのもんじゃあない」

「そんな堅い事言わないでさあ」

「金がいるんだったら、はっきり言いなさい。少しならなんとかするよ」

「そういう訳にはいかないよ、だって俺はゆすりたかりじゃあないんだからさあ。現金で受け取るって訳にはいかないでしょ。ね、頼むよ、ね。ちょろちょろっと描いてやって、ちょろちょろっとさあ」

「君ねえ、絵描きが絵を描くって事は真剣勝負なんだぞ。ちょろちょろっと描けるか」

「何言ってんだよ。内に来た時、ちょろちょろっと描いたじゃないか。右から左、七万円だよ。いい商売だなって想ったよ。絵を売って金稼いで何で悪いんだ、高い金で売っぱらうから、こういうどでかい屋敷に住んでんだろう」

「売っぱらうとは何だ。いっぺんだって今まで自分の絵を売っぱらった事なんかないぞ。いいか、僕の今……」

「描かないのか！」
「断る」
寅次郎は立上がって、
「結構だよ。結構毛だらけ、猫灰だらけだよ」と言って、帰ろうとして、また振り返り、
「これだけは言っとくけどなあ、初めて上野の焼き鳥屋で会った時、こんな大金持ちだとは想わなかったよ。いずれ身寄り頼りの無い宿無しの爺さんだと思って、可哀相だと思って一晩泊めてやろうと思って俺んちへ連れて行ったんじゃねえか。もしあのまま気に入ってずっといてえって言うんだったら、多少迷惑は辛抱しても一ヵ月でも二ヵ月でも泊めてやっても良いってそう思ってたんだ。本当にそう思ったんだよ。それを何だよ、働き者の芸者が大事に貯めた金騙し取られて、悲しい思いしてるってのに、てめえ、これっぽしも同情してねえじゃねえか。てめえみたいな奴、こっちから付き合い断らあい。二度とてめえのつらなんか見たかねえよ、邪魔したなあ」
と啖呵を切って寅次郎は出て行く。
青観はしばらく玄関で座ったままじっとしていた。
ぼたんは龍野へ帰る。
夏になった或る日、青観がとらやを訪ねる。
「あのー」とおばちゃんがびっくりして、名前を忘れる。
「青観です」
「ああ、そうそう、青観先生」
さくらが出て来て、
「その節は大変失礼いたしました」と三人は頭を下げる。

四七

「いえいえ、あの、寅次郎君、居ますか」
「あの馬鹿がまた何か失礼なことでも」
「ろくな教育も受けておりませんので、どうかお許し下さい」
とまた三人は頭を下げる。
「留守ですか」
「実は先月末、旅に出まして」とさくら。
「どんな御用でございましょうか」とおじちゃん。
「たいした事じゃあないんだ。そう、寅次郎君は旅か」と青観は呟く様に言う。
そして「じゃ、失礼」と言って帰る。
さくらは青観の後を追い掛ける。
「先生、龍野では兄が大変ご迷惑をおかけして」と頭を下げる。
「いやいや、かえって助かりましたよ。あなたでしたか、いつか金を返しに見えたのは」
「はい、その節はほんとに失礼いたしました」
そして暫らく黙って歩く。
「あのー、わざわざお越しいただいて、どんな御用だったのでしょうか」
「ま、歩きながら話しましょう」
二人は帝釈天の方へ歩いて行く。
寅次郎は再び龍野に来ている。そしてぼたんの家を訪ねる。
寅次郎を見たぼたんはびっくりする。「いやぁ、寅さんやないの、何で？」

「決まってるじゃねえかよう、お前さんと所帯を持とうと思ってやってきたんだよう、へへへへ」と笑いながら言う。
「ちょっと、ちょっと、入って」とぼたんは寅次郎の腕を掴んで、ひっぱる。
そして家の中へ入ったぼたんは、「ほら、見て！　分かる」と指差す。
そこには額に入った一枚の絵があった。
「青観先生の絵よ。ついこの間、送ってくれたんよ。私、びっくりしてしもうて。添えてあった手紙にはな、龍野では色々お世話になったから、君にあげるとしか書いてあれへんのよ。それでね、私市長さんにこの絵を見せたの。そしたら市長さんもびっくりしやはって、二百万円出すからこの絵を譲ってくれ、いわはったん。けど、私譲らへん。一千万円積まれても譲らへん。一生宝物にするんや」
「ぼたん、ちょっと来い」と寅次郎はぼたんの手をひっぱって外へ出る。
「ぼたん、東京はどっちだ、東京は！」
「東京？　こっちやろか」と指差す。
寅次郎はその方向に向いて、傍に置いてある樽の上に乗って、手を合わせて、
「先生、勘弁してくれよ。俺がいつか言った事は悪かった。水に流してくれ。先生、有難う、本当に有難う」と言う。
この「寅次郎夕焼け小焼け」の後半は、前半と違って、芸者ぼたんを中心にして、物語が展開する。龍野で出会った芸者ぼたんは、二年前に悪い男に二百万円もの金を騙し取られ、それを返してもらいに上京した。そしてタコ社長と一緒にその男に会うが、男は財産はみんな弟や妻の名義にしてあるので、自分は無一文だと言い、裁判で決着をつけようと開き直る。恐らく「男はつらいよ」シリーズに登場する唯一の悪人である。それを聞いた寅次郎は義侠心を出して、その男を殺すと言って出掛けるが、肝腎のその男が何処に住んでいるのか、知らない事に気づき、帰るに帰れず青観の所へ行き、ぼたんのために絵を描いてくれと頼む。しかし青観は断る。寅次郎は啖呵を吐いて帰るが、最

四九

後の場面で、青観はぼたんのために絵を描いてくれたと言う事が分かる。

この寅次郎の行為、つまり青観の所へ行き、可哀相な芸者ぼたんのために絵を描いてくれと頼む行為は、交換システムを無視した行為である。青観はこの映画の中では、日本で一流の画家であり、その絵は何百万円もの価値が有る。寅次郎はそれをただで描いてくれと青観に頼むのである。青観の絵に限らず、画家の絵は画商を通して売られるのであり、あるいはこの映画の最初の場面に出て来る様に、(「映画『男はつらいよ』の社会学的分析」『徳山大学総合経済研究所紀要二十号』参照)古書店を通して売られる事も有る様だ。この映画の最初の場面で、青観に頼まれて神田の古書店へ、青観の描いた絵を売りに行く行為は、交換システムを介した行為であるが故に、合理的行為であると言える。しかし、この後半部分に出て来る場面は、そうした交換システムを介さずに為そうとする行為であるが故に、合理的行為であるとは言い難い。

寅次郎は本来は経済的行為である画家に絵を描いてもらう行為を、交換システムを介さずに描く様に頼むのであるが、それは寅次郎が青観の描いた絵を誰かに売って儲けるためではなくて、可哀相な芸者ぼたんのために、と画家の青観の情に訴える。つまり、寅次郎は大画家である青観の情に訴えて、絵を描くように頼むのである。人間は利潤を追求する合理的な面ばかりではなくて、感情的な生き物でもある。寅次郎はその情に訴える。何故ならば、しがない香具師の寅次郎にとって、何百万円の金は手の届かない所に有る訳だから、彼に残された武器は大画家青観の情に訴えるしか方法が無かったのである。

それでは、情とか情けの社会学的意義はどのようなものであろうか。まず、情に基づく行為は交換システムに由来するのではなくて、人間相互の繋がりに由来すると言って良い。先に述べた恋愛的行為は、個に由来する行為であり、それが行為連関となることによって、男女の排他的な親密さを形成することを目指す。ところが、情に基づく行為は、人間と人間との既に形成されている連関に基づく。つまり、情とは、自分との間に親密な繋がりの有る人間と

の間の絆に基づくものであり、従って交換システムに由来する利潤追求的行為はその場合には無い。この場合には、青観と寅次郎との間の人間的な絆が寅次郎をして、青観の情に訴える行為を為さしめたのである。

それ故に、青観はぼたんのために絵を描く社会的義務は無い。つまり青観が絵を描かなくても社会的な制裁を受ける事は無い。もし青観が何らかの交換システムを介して絵を描く様な依頼を受けて、それに対する報酬を期待していたならば、彼は絵を描く社会的義務が有り、もしその義務を怠ったら、彼の社会的信用に傷がつくだろう。

ところが、この場合には、青観は寅次郎との人間的な繋がりから、寅次郎に絵を描く様に依頼を受けたのであり、寅次郎は何らかの交換システムを介さず、ただ青観との間の人間的な繋がりから、青観の情に訴えた。その場合には、青観は寅次郎の依頼を拒否することも出来たし、寅次郎が依頼のために来た時には、その依頼を拒否したのであるが、最後の場面で、青観が寅次郎の依頼通りにぼたんのために絵を描いた事が分かる。

寅次郎は青観との今までの繋がりから、青観の情に訴えたのであるが、しかし寅次郎のそうした行為は実はぼたんへの情にもとづいているのである。つまり、悪い男に二百万円の金を騙し取られた可哀相な芸者ぼたんへの情が、寅次郎をして青観の情に訴える行為に走らせたのである。つまり、寅次郎のそうした行為は芸者ぼたんへと向かっているのであり、言い換えれば、寅次郎の行為は何らかの交換システムへと還元するための行為でもなく、自らの利潤追求のための行為でもなく、その行為が目指すのはぼたんであり、ぼたんと言う女性の利益のためである。すなわち寅次郎と青観との行為連関は、その行為連関を仕掛けた寅次郎の目的通りに芸者ぼたんへと向かったのである。これは情に基づく行為連関に特徴的な事である。通常の行為連関は、行為主体が何らかの利益を享受するためである場合が多いのであるが、情に基づく行為は行為主体が情を抱く相手の利益のためである。寅次郎がぼたんに抱く情は、寅次郎とぼたんの間の人間的繋がりに基づくのであり、その繋がりが寅次郎にぼたんへの情を抱かせたのであり、そして青観に絵を描いてもらう様に頼む行為に出たのである。

五一

そして青観の場合には、ぼたんとの繋がりはあまり無く、この映画の最後の場面で分かる様に、彼がぼたんのために絵を描いたのは、寅次郎との人間的繋がりによってであり、言わば寅次郎のぼたんへの情にほだされて、ぼたんのために絵を描くと言う、交換システムを無視した行為に出たのである。つまり、この三人の人間の情的関係はどのようになっているかと言えば、まず寅次郎は芸者ぼたんへの情のために、青観の寅次郎への情を利用したと言える（利用と言う言葉は適当ではないかもしれないが）。そして、青観は寅次郎のぼたんへの情に打たれて、つまり寅次郎との情的関係（あるいはゲマインシャフト的関係）によって、ぼたんのために交換システムを無視した行為を為したのである。すなわち、寅次郎と青観は互いの人間的繋がりによって、ぼたんのための行為を為したのである。そしてこの場合ぼたんは、行為連関の主体ではなくて、あくまで二人の情的行為を享受する側に立っていたと言える。

次に第三十九作目の「寅次郎物語」を取り上げて、非合理的行為についてさらに分析してみよう。マドンナは秋吉久美子。

或る日、とらやに知らない少年が寅次郎を訪ねて来る。その少年は秀吉と言い、寅次郎の仕事仲間の子供らしく、母親は何年か前にいなくなり、父親は最近亡くなったらしい。とらやの人々は途方に暮れていると、寅次郎が帰って来る。そして秀吉の母親を探しに行くと言う。秀吉の母親は、寅次郎の仲間の話によれば、和歌山に居るらしい。寅次郎は秀吉を連れて和歌山へ向かう。

そして駅前のタクシーの運転手に和歌の浦の旅館で働いているらしいと聞いて、そこへ向かうが、もう秀吉の母親はそこにはいなかった。しかし、奈良県の吉野町に居ると言う事が分かった。寅次郎はふらふらになって旅館に着く。しかし、そこには秀吉の母親はもういない。がっかりしていると、秀吉が熱を出す。

寅次郎はどうしたら良いか分からず、さくらの家に電話する。

さくらの家の電話が鳴る。

さくらが、「誰だろう今頃、満男、出てくれる」と満男に頼む。
満男が電話に出る。「はい。会えたの母さんに？　……ちょっと待って」と言って、さくらに代わる。
「私、坊やが？　お兄ちゃん、今何処に居るの？　坊やそこに居るのね？　ちょっと落ち着いて、どんな様子か話してみて。戻した!?　いつ？　額に手を当ててご覧なさい。自分のじゃないのよ、坊やの！　馬鹿みいたに熱い？身体が震えてない？　…すぐお医者さん呼びなさい。……」
吉野町の旅館で、寅次郎が電話している。
「医者呼ぶ？　だってお前、こんな夜中にか？」
電話の向こうのさくらの声。
〈そんな事言ってる場合じゃないの。たたき起こしてでもいいから来てもらうの。子供ってもろいのよ。もしもの事があったらどうするの？　お兄ちゃんの子供じゃあないのよ〉
「そういう事言うなよ、お前。分かったよ、それじゃあ、そうするよ」
〈もしもし、旅館の名前は？〉
「ええと、萩の間、萩の間だって」
〈旅館の名前だって〉
「ええと、ええとねえ。水山荘、花の吉野だよ、分かるか？」
〈分かった、すぐ行くのよ、病院〉
「うん、そうするよ」と受話器を置く。
そして「とんでもない事になっちゃったなあ。だから生き物飼うの嫌なんだよ、俺」と呟きながら、立上がる。そして、

「おい、誰かいねえか！　誰かいたら顔出してくれよ」と下に向かって声を出す。
旅館の主人が顔を出す。
「お、医者呼んでくれ。子供の具合悪いから」
「こんな時間にでっかぁ？　とんぷくやったらおますけど」
「いや、医師じゃなかったら駄目なんだよ。命にかかわるんだから。子供が死んじゃったら、お前、責任とってくれるのか」
「一応電話します」と言って、部屋に戻ろうとすると、寅次郎が、
「いいよ、いいよ、俺が行って、たたき起こして連れて来るから。その代わり子供の面倒を見てくれ、子供の」
すると、隣の部屋に泊まっている女性、阪井たかこ（秋吉久美子）が出て来て、
「大丈夫、私が面倒見るから。お父さん、早よう行きなさい」と言う。
「はい、どうもご親切に有難う」と寅次郎は礼を言い、
「おい、タクシーを呼んでくれ、タクシーを」と大声を出す。
寅次郎は医者の家のドアを叩いて、
「先生、先生」と叫ぶ。
医者（松村達夫）が出てくる。
「実はな、子供が病気でもって死にそうなんだ。頼むからすぐ来て」
「いやいや、ちょっと待ってくれよ。わしはなあ、もう隠居なんよ」
「そんなことはかまわねえから来てくれって言ってんだよ」
と寅次郎は医者の背中を押して、無理遣り連れて行こうとする。

「倅れはなあ、今、学会で東京にいっとるんよ」
「だったら、爺さんでいいから来てくれって、言ってんだよ、頼むから」
「わしは耳鼻科だぞ」
「そんなことはかまわねえって。診察鞄何処？　診察鞄」と寅次郎は勝手に家の中へ入る。
「おい、こら！　ちょっと待たんか」
寅次郎は無理遣り医者をタクシーに乗せる。
旅館では、たか子が秀吉の額を濡れたタオルで冷やしている。
そこへ医者が転がり込む様に、寅次郎と一緒に入って来る。
「もう、えらい目におうた」
と言いながら、秀吉の額に手を当てたり、目を見たりする。そして、
「なんでほっといたんや、こんなになるまで！」
と寅次郎を怒鳴る。
「手遅れか？」と寅次郎が心配そうに聞く。
医者は診察鞄を開けて、何かを取り出そうとする。
「何だこれ？」と鞄の中から何かを取り出して、寅次郎に聞く。
「時計や」と宿の主人が言う。
「分かってるよ、そんなこと」と寅次郎が突き飛ばす。
「割り箸ないか、割り箸？」と医師は宿の主人に聞く。
「何か召し上がるんですか？」と宿の主人が聞く。

五五

「馬鹿！　舌を押さえるんだ」と医者は怒鳴る。
たか子が近くに有る割り箸を医者に渡す。医者は「坊や、あーんして」と言って、秀吉の口の中を見る。
それを見ながら寅次郎が、「酷い事になっちゃったなあ、嫌なんだよ、こういうこと」と呟く。
「一緒に暮らしてて、どうして気がつかんの、こんなに酷くなるまで」とたか子が寅次郎をなじる。
「いや、昼間ぴんぴんぴんぴんしてたんだよ」
「呆れた、それでも親なの」
「親じゃないんだね、これがまた」と寅次郎が言うと、
「夫婦喧嘩なんかしてる場合かい、馬鹿！」と医者が怒鳴る。
「すみません」とたか子が謝る。
「今夜勝負じゃからな」と医者はノートに何かを書く。
「父さん、あんたもういっぺんわしの家へ行ってなあ、この紙をばあさんに見せて、薬もろうて来てくれ」
「はい」
「お母さん、部屋暖めなさい」
「はい」
それから宿の主人に、「御主人、コーヒー持って来てくれ。インスタントで良い」と言う。
「コーヒーが効くんですか、こういう場合は」と宿の主人。
「馬鹿、わしが飲むんじゃ」
「常識だよ、馬鹿」と寅次郎。
寅次郎と宿の主人は立ち上がり、部屋から出て行こうとすると、たか子が、

「ああ、お父さん、帳場に寄ってタオル何枚か届ける様に言うて」と言う。
「うん、母さん、後頼んだぜ」と寅次郎は部屋を出る。
後に残ったたか子は医者に、「先生、どんな具合ですか？」と尋ねる。
医者は秀吉の胸に聴診器を当てながら、
「薬が効いて、明日の朝までに熱が下りゃあ安心なんじゃが」と言う。
そして「お母さん、お尻出しなさい」とたか子に言う。
「お尻？」とたか子はびっくりする。
「あなたのお尻じゃない。子供のお尻じゃ。なんちゅう母親じゃろう、ほんま」
たか子は秀吉をうつぶせにして、秀吉の下着を下ろす。
「あんたが尻見たってしょうがない。わしに見せなさい」
と医者は注射器を出す。そして、
「坊や、頑張れよ、お爺ちゃんも一生懸命手当てするさかいな」と言う。
「しっかりするのよ、大丈夫やもんね」とたか子。
そして夜明け前。秀吉が小さい声で、「小父さん」と言う。
「何か言った」と横で添い寝していたたか子が起き上がる。
「喉乾いた」と秀吉は小声で言う。
「喉、乾いたの？」とたか子は秀吉の額に手を当てる。
「ああ、熱が下がってる」とたか子は秀吉を抱き締める。
「頑張ったねえ、坊や。もう大丈夫よ」

五七

たか子は枕元の電気スタンドを点けて、部屋の隅で寝ている寅次郎を起こす。
「ねえ、お父さん、起きて」と寅次郎の手を握る。
「駄目か」と寅次郎は寝惚けてそう言う。
「違う、熱が、熱が下がったのよ。ほら、顔色もよくなって」
とたか子は秀吉の枕元に行き、秀吉の手を握る。
「何飲みたい？　牛乳？　ジュース？　両方、両方買ってきたげるね」
と言って部屋を出て行く。
「治ったか、ああ、良かった、良かった」と残された寅次郎は呟く。
たか子は外の自動販売機で、牛乳とジュースを買う。
とらやではさくらが来る。そして博に、
「ねえ、電話あった？　お兄ちゃんから」と聞く。
「まだ」と博が言うと、さくらはがっかりして座り込む。
そして、「失敗だったわ、坊や行かせたのは。今更言ったってしょうがないけどね」
と呟く。
「そんなに悪いのか」とおじちゃん。
「扁桃腺ぐらいだったらいいけど、肺炎だったら、即入院よ」
と言って、博に「行かなきゃいけないかしら、私も」と言うと、博が紙を出して、
「これ今調べたんだ、水山荘、かけてみろ」とさくらに渡す。
さくらは紙を持って、電話の所に行く。

「もしもし、あのー、私東京から電話してるものですが、車寅次郎はお宅に泊まっていますか？　あっ、お願いします」

すると、受話器の向こうで、女性の声がする。

〈もしもし〉

「あのー、私、車寅次郎の身内の者ですが」

〈あ、はい、お待ち下さい。お父さん、電話〉

それを聞いて、さくらはびっくりする。

〈はい、へーい、何でしょうか〉と寅次郎の声。

「あの、私、さくらよ」

水山荘の部屋。寅次郎が受話器を持っている。

「おお、さくらか。今、こっちから電話しようと思ったんだ。悪かったな。え、うん、良くなった、今、医者が来てねえ、もう大丈夫だって、帰って行ったよ。子供が良くなるってのは速いなあ。（たか子の方へ向いて）母さん、呼んでるよ。（電話に）心配かけて悪かったな。ま、そういう訳だから、みんなによろしく言ってくれ」と言って、受話器を置く。

とらやで

「もしもし」とさくらが電話で寅次郎を呼んだが、電話が切れたので、受話器を置きながら、妙な顔をする。

「どうなんだ、病気は？」と博が聞く。

「うん、お医者さんがもう大丈夫だってそう言ったって」

「ああ、そりゃあよかった」とおじちゃん。

五九

博はさくらが浮かない顔をしているので、
「どうしたんだよ」と尋ねる。
「空耳かしら、最初に女の人が出てね、お父さんって呼んだの、そしたらお兄ちゃんが『あいよ』って返事して出て来たの」
「たまたま女中さんが居たんじゃないのか」
「ああ、そうか」
「そうだよ、びっくりしたよ。おどかさないでくれよ」
「でも、お兄ちゃん、電話の途中で母さんって呼んだわ。そしたら、女の人の声で『はい』って返事があったけど」
「それこそ、空耳だよ、しっかりしろ」
「そうね、このところ満男の受験の事や、あの坊やの事で頭が混乱しているから……嘘ぉ……言ったわよ、確かに」
「じゃあ、もう一度かけて確かめればいいじゃないか。いい、いい、俺がかけよう」と博はさくらから電話番号を書いてある紙を受け取って、電話をかける。
水山荘のフロント。宿の主人がテレビを見ている。そこへ電話がかかる。
「はい、水山荘です。車さん、ああ、ついさっき買物に行くとか言って、出掛けましたけど、奥さんと一緒に。よろしいですか、いえいえ、はいどうも」と言って、受話器を置く。そして思い出した様に、「あっ、奥さんやなかったか。まあええわ、似た様なもんや」と独り言を言って、またテレビの方を見る。
とらやでは、博が呆然として電話の前で立っている。
横からさくらが「どうしたの、居なかったの?」と尋ねる。
「奥さんと出掛けてるって。確かそう聞こえたなあ」と言って、向こうへ行く。

寅次郎とたか子は互いに名乗り合い、寅次郎はたか子に礼を言う。たか子は昨夜は或る男と一緒にあの宿に泊まる予定だったが、男の方に用事が出来て、結局一人で泊まる事になり、窓から川に飛び込んで死のうかと思ってた、と言う。しかし、もし男と一緒だったら隣で何をしてようと気にもかけずに、下らない時間を過ごしていた。だから、本当によかったと言う。

寅次郎は、死んだ父親の遺言通りに、寅次郎を訪ねて来たかつての仲間の子供、秀吉を連れて、秀吉の母親探しの旅に出る。そして、奈良のとある町で熱を出した秀吉を、たまたま同じ旅館の隣の部屋に泊まっていた女性、坂井たか子と一緒に徹夜で看病する。そうする内にたか子と気持ちの触合いが生ずる。先の「寅次郎物語」から引用した部分はそういう場面である。それで、この場面についてこれから分析しよう。

まず寅次郎がかつての仲間の子供である秀吉を連れて、子供の母親探しに行く事の社会学的意味について考えよう。勿論寅次郎のそうした行為は交換システムを媒介にした行為ではないし、言わば渡世人仲間の義理と言う表現を使えば、すっきりするであろうが、それでは義理とは何か。

アメリカの人類学者ルース・ベネディクトは義理について次の様に述べている。

「『義理』は二つの全く異なる部類に分けられる。私が『世間に対する義理』――文字通りには『義理を返すこと』――と呼ぶところのものは、同輩に『恩』を返す義務であり、名に対する義理と呼ぶのは、大体ドイツ人の『名誉』のようなものであって、自分の名と名声とを他人からそしりを受けて汚さないようにする義務である。『義務』が生まれ落ちると同時に生じる親密な義務の履行であると感じられているのに対して、世間に対する『義理』は、大ざっぱにいえば、契約関係の履行ということができる。」（ルース・ベネディクト『菊と刀』）

寅次郎のこの行為が義理に基づくものかどうかについて今結論を出さないでおこう。寅次郎自身が秀吉の父親である般若のまさに、どれほどの恩があるのかは、映画の中では全く語られていない。だから寅次郎の行為は、社会によ

って強制された行為でないかどうかについても結論を急がない様にしよう。母親探しの旅に出る行為によって、寅次郎が社会報酬を受けると言う事も無いし、彼もそうした事を期待して、そうした行為を為した訳ではないだろう。まず言える事は、寅次郎が秀吉を連れて母親探しの旅に出る、と言う行為、あるいは今までの用語で言うならば、役割を引き受けたのは、交換システムによって役割を分節されたからではない。通常の場合、我々が社会から引き受ける役割は、交換システムによって分節されることによってである。しかし、この場合の寅次郎の役割は、いかなる交換システムによっても与えられた役割ではない。言わば、寅次郎が主体的に引き受けた役割である。つまり秀吉と言うかつての仲間の子供の母親を探すと言う役割は、寅次郎が自ら引き受けた役割である。

我々の社会的役割の中で自らが引き受ける役割とは、どのような役割であろうか。仕事をすると言う事は、勿論何らかの交換システムに内属することによって、その交換システムによって与えられた役割を遂行することである。あるいは、恋愛的行為の場合は、その相関者との間の親密さを目指すための男としての、あるいは女としての役割であり、恋愛的行為連関それ自身によって規定された役割であって、自らが引き受けた役割ではない。つまり、恋愛的相互作用の中に元々存在している役割が、男としての、女としての役割であり、それは恋愛的行為連関に内属しているのである。だから、恋愛的行為を為す場合には、その役割を引き受けなければならないのである。

また、家庭内で夫として、妻として、あるいは子供として振る舞う事は、家庭と言う一種の共同体によって分節された役割であり、家庭を持てば引き受けざるを得ない役割である。また、何処かのデパートとか、スーパーとかに買物に行く場合、デパートやスーパーは勿論交換システムであり、そこで買物をすると言う事は、その交換システムによって客としての役割を与えられているのである、と言う事になる。

また自分の住んでいる地域社会で、町内会の役員を引き受けると言う場合はどうであろうか。その場合も、町内会と言う地域組織（交換システムではないとしても）がそれを維持するためのシステムであり、その地域組織に属して

いる限りは、何らかの形でいずれは引き受けなければならない役割である。ただ、そうした地域組織は、交換システムの様に社会の中枢を為しているのではなくて、言わば社会の中のサブシステムであると言って良い。また類似した組織として、子供が通う学校のＰＴＡと言う組織が有るが、これも交換システムの様に社会の中枢を占めている組織ではなくて、やはり社会のサブシステムであると言える。その中での或る役割を引き受ける場合も、既にその組織の中に存在している役割を持ち回りで引き受ける訳であるから、言わば義務的にその役割を引き受けるのである。

このように見てみると、我々が主体的に引き受ける役割は、我々の日常的な生活の中には以外と少ない。我々が自分達の生活の中での殆どの役割は、社会からの何らかの要求が有って、半ば強制的に引き受けざるを得ないで引き受ける場合が多い。

寅次郎のこの場合は、寅次郎にそのような行為を、あるいは役割を引き受ける様に仕向ける何らかの強制力が社会の中に有ったのであろうか。有るとすれば、それは彼が生業としている香具師仲間の義理であるが、先のベネディクトの『菊と刀』からの引用に有った様に、義理とは恩に対する義理であり、寅次郎が般若のまさなる人物に何らかの恩を受けたかどうかは、この映画の中にその人物が全く登場しないので分からないが、それらしい台詞は無い。ただ、大阪の安宿で秀吉と一緒に泊まった夜、寅次郎が般若のまさの位牌を前にして、酒を飲む場面が有る。その場面が何らかの参考になるようなので、引用してみよう。

寅次郎は旅館の部屋の机の上に般若のまさの位牌を置いて、酒を飲んでいる。

そして、位牌に書いてある戒名を読んで、

「釈善政か。何が善だよ。悪い事ばっかりしやがって。どうせ今頃は地獄の針の山かなんかでもって、けつかなんか刺されて、いててて、なんて言ってんだろう。どんな人間でも取り柄が有って、悲しまれ、惜しまれ、死ぬんだよ。お前が死んだ時に悲しんだのはサラ金の取り立て人だけだったって言うじゃねえか。情けねえなあ。たった一度の人

六三

生をどうしてそう粗末にしちまったんだ。ええ、お前は何のために生きてきたんだ？　何？　てめえの事棚に上げてる？　当たり前じゃねえか。そうしなきゃ、こんな事言えるかい」

秀吉の方を向いて、

「なあ、坊主」と言って、また酒を飲む。

そして、飲んでた酒がなくなると、位牌の前に置いてあった酒を取って、

「飲んだか？　じゃあ貰うぞ」と、その酒を飲む。そして、深い溜息をつく。

この場面を見ると、秀吉の父親とは酷い男だったらしいと言う事の予想がつく。つまり、想像でしか言えないが、こんな酷い男から寅次郎が何らかの恩を受けているとは思えない。従って、寅次郎の行為は同業者である秀吉の父親からの恩によるとは言い難い。あるいは香具師の間には、仲間の間の強い絆が有ったのだろうか。

仮にそうした香具師の間の強い仲間意識から、寅次郎が、かつての仲間の遺言通りに、その遺児である秀吉を連れて秀吉の母親探しの旅に出掛けたとしよう。その場合に、寅次郎はそうした香具師仲間の義理の様なものに動機づけられて行為を為した事になるが、そうした香具師の仲間意識に由来する義理から、寅次郎がそうした行為に出たと言うだけでは、彼の行為の説明としては弱い様に思える。そうした仲間意識とか、義理とかだけでは、寅次郎の行為の説明としては不充分である様に思える。

まず寅次郎が引き受けた役割、すなわちかつての仲間の遺児である秀吉を連れて、母親探しの旅に出ると言う役割は、社会の中の様々なシステムには既存のものとしては存在しない。親無し子を受け入れる施設の様なものは有るだろうが、あるいは映画の中にちょっと出て来た「児童福祉相談所」の様な施設も有るだろうが、それらは制度として社会的な機能の一翼を担っているのである。

参考のためにさくらと「児童福祉相談所」の職員との会話の部分を引用してみよう。

寅次郎が秀吉を連れて旅に出た後、さくらはその相談所に行く。そこでの職員との会話。

「困りましたねえ、そんな単純じゃないんですよ、この問題は。いいですか、まず第一に打つべき手は、秀吉君を施設に保護することなんです。皆さんは施設って言うと寒々した所を想像するんでしょうけれども、そんなことないんですよ。法律で決められて、専門家が生活指導の検討会議をきちんと行なっている場所ですからねえ。ごらんになれば分かりますよ。葛飾にも沢山あります」

「すいません、気がつかなくて。なにしろ、お母さんに早く会わせたい、そればっかり考えていたもんですから」

「それは私達がやることなんです。だってそうでしょう、お母さんにはお母さんの事情があって、子供を引き取れるかどうか分からないんですから」

「そうですねえ」

「まったく困りましたねえ、今から捕まえる訳にもいかないでしょうし。ちょっと失礼」と職員は何処かに電話する。

その夜、とらやで。

博が「確かにまずかったなあ」と呟く。

「お兄ちゃん一人で行かせるべきだったのよ、きっと」とさくら。

「しょうがないだろう、こっちは善意でやったんだから」とおじちゃん。

「善意だけですまされない事だってあるでしょ、世の中には」とさくら。

このシーンでも分かる様に寅次郎は、この「児童福祉相談所」がやるべき仕事を引き受けた、と言う事になるのであろうが、「児童福祉相談所」は言わば公共施設であり、その肩代わりを一私人がやるべきことではないし、また寅次郎もそうした施設が有る事すら知らなかったであろう。従って、寅次郎は社会の中には現実には存在しない役割を

自ら創造して、それを引き受けたと言うべきであろう。つまり、彼は現実にはどのような社会組織からも与えられない役割を引き受けた訳であるから、彼が自らそうした社会的役割を彼自身が行為することによって創造したと言う事が出来るだろう。つまり、公共施設の職員ではない一私人が子供をその子の母親の所へ連れて行くと言った役割は、現在の社会の中には存在しないが故に、寅次郎はそうした現実には存在しない役割を、自らの行為によって創造したのである。すなわち、本来ならば、児童相談所の職員がやるべき仕事を、素人の寅次郎が引き受けたのである。

それでは、寅次郎がそのように現実には存在しない役割を創造してまで、そうした行為を遂行する理由は何であろうか。既に述べた様に、同業者間の義理のためだけでは、彼の行為の理由としては弱い。彼は、父親を失った子供を母親に結びつけるために、はるばる和歌山まで行くのであるが、子供を親に結びつけると言う事は、どのような意味が有るのであろうか。

社会とは人間相互の繋がりであり、それを私は前に人間相互の行為連関と言う言葉で表現した。行為連関は意味の共有に基づく相互理解を前提にしている。つまり相手が今何をしているのか、どのような状態であるのか、についての理解が互いに無ければ、行為連関は成立しない。すなわち、様々な物の意味についての理解の共有を前提にして、相互の行為の仕方の理解が成立し、それに基づいて相互の理解の深まりが生ずる。そのプロセスにおいて行為連関が生ずるのである。

以前に社会とは何かについての定義をした際に、社会とは意味の集合態であり、そしてそれに基づいた行為連関であり、さらに交換システムであると述べた。ここでは、交換システム外での人間の行為を問題としているのであるが、交換システムが社会の中枢を為していると言う事は間違い無い。

そして話を元に戻すと、寅次郎が秀吉を母親に合わせるために、はるばると東京から和歌山まで行ったのは、行為連関としての社会に内属させるためである、と言っていいのではないだろうか。つまり、人間の子供は例外を除いて、

親に育てられることによって、社会に帰属することが出来るのである。つまり、親の下で諸々の教育を受けて、躾けられることによって、人間は社会の行為連関の中に組み込まれる事が出来るのである。確かに、両親の無い子供が施設で育てられて、一人前の人間になって社会の中に帰属出来た例も勿論有るが、そうした場合には余計な多くの苦労を伴わなければならない。親の下で育てられることによって、人間は容易に社会の中に適合出来るのである。

すなわち、寅次郎自身が意識していようといまいとに拘らず、彼は秀吉を社会への絆へと結合させるために、母親探しの旅に出たのである。その動機は、両親の無い子供は可哀相だ、と言った情となって現われるのであるが、その情は寅次郎個人に由来するものではなくて、社会にその根源を持っているのである。つまり、寅次郎の秀吉に対する情は、社会から来る情である。それが先に述べた「寅次郎夕焼け小焼け」の場合の、寅次郎のぼたんに対する情とは違う所である。先の場合では、寅次郎のぼたんへの情は、寅次郎とぼたんとの間の関係に由来するものであるが、この場合には、その情は社会に由来するものである。

何故ならば、ぼたんは一人前の大人であり、二百万円を騙し取られたけれども、芸者として社会の諸々の行為連関の中に既に入り込んでいる訳であり、寅次郎の助けがなくても、何とかやっていってる。寅次郎がぼたんに対する情から、ぼたんを騙した男に仕返しに行こうとしたり、青観の所に行って絵を描く事を依頼したりすることは、寅次郎とぼたんとの人間的な繋がりに由来するものである。

ところが、秀吉はまだ子供であり、無力な存在である。一人では何も出来ない存在である。その子供を親に結びつける様に要求するのは、個々の人間であるよりも、社会全体であると言って良い。つまり、行為連関としての社会は、個々人をその行為連関の中に組み込ませる様に要求するのである。この表現は別に社会を擬人化した表現ではない。社会は交換システムを枢軸とする行為連関であり、一人一人の人間が既存の何らかの行為連関の中に入り込んで、その行為連関を維持することによって、社会の現在の姿を維持することを人々に要求するのである。その代弁者は学校

六七

の教師であったり、親であったり、祖母や祖父であったりするのであるが、そうした保護者が社会の代弁者となって、要求することは、一人一人の人間が行為連関としての社会の中に組み込まれて、社会人としてやっていける事である。

勿論寅次郎はそういう事を自覚していなかったけれども、彼にそうした行為を促したのは、彼の背後に有る社会である。その社会が彼に義理と言った理由を与えて、彼にそうした行為を為さしめたのである。

現代社会では、少なくとも義務教育を受けることによって、社会的存在として振る舞う仕方を身につける事を人々は要求するのである。つまり、そうした社会の要求に従わないと、一人前な人間として、諸々の行為連関としての社会の中に入り込む事が出来ないのである。すなわち、社会が人々に、社会の行為連関の中に入り込むのに充分な教育や躾けを要求しているのである。そして、寅次郎はそうした社会の要求に従って、秀吉を連れて旅に出たのである。

それに対して、たか子の場合はどうであろうか。たまたま寅次郎と同じ旅館に泊まっていて、隣の部屋に居たために、熱を出した秀吉の面倒を見る事になったのであるが、勿論たか子にとって寅次郎も秀吉も赤の他人であり、何の繋がりもない訳である。このたか子の行為の意味は何か、と言う事を次に問題としよう。

まず言える事は、幼い子供が病気で死にかかっている、と言う事についての共通認識である。これは、既に述べた意味の共有と言う事の延長線上において言える事である。つまり、たか子は、寅次郎と同様に、死に瀕した子供と、それを取り巻く状況についての認識を得たのである。それを取り巻く状況とは、病人である子供は死に瀕していると言う事、それにもう夜遅く、医者が来てくれるかどうか分からないと言った事であり、そうした状況についての共通認識を寅次郎と共有していたのである。

パーソンズは病気についての社会学的考察をなしており、病気について次の様に述べている。

「私は、社会的役割としての病気の主な特徴を次のように系統立てて説明した。(1) 病気は、病人が他者によって同情と支持と援助をもって扱われることを当てにしうる、全面的にではないが条件つきで正当化された状態である。

しかし、病気はそれ自体『良いこと』として評価されることはない。(2) 健康であれば仕事や家庭内の義務を果たし、他者に対して思慮分別をもって振る舞わなければならぬが、病気のときには、そうした通常の期待を遂行することを免除される。(3) 病気は、それらの遂行を免除される正当な基盤なのである。病気は遂行能力のそこなわれた状態であるから、病人が意志の力によって『回復して』よくなるというようなやり方で自己の状態の責任を取らなくてもよい。(4) 病気は、他の諸目標以上に優先された一つのはっきりした帰属的目標――すなわち、『健康を回復すること』――という行為目標をもっている。病人自身は、充分な医療技術の援助を求めることおよび健康を回復するために積極的に治癒にたずさわる人々と協力することが要求される。」(T・パーソンズ『社会構造とパーソナリティ』)

すなわち、病人は少なくとも現代社会では、回復するための治療を受ける権利が有る訳であり、またその周囲の人間は病人が治癒するために何らかの方策を取る必要が有る。この場合に寅次郎の置かれた状況は、死に瀕している秀吉を何らかの形で治療しなければならないが、もう夜遅く、医者が来てくれるかどうか分からない、と言った状況である。彼は医者を呼びに行くが、彼の留守の間に誰かが病人の面倒を見なければならない。そうした役割を引き受けたのが、隣部屋に泊まっていたたか子であり、彼女が、寅次郎が留守の間に病人の看護をする役割を引き受けたのである。つまり、たか子には寅次郎と秀吉が置かれた状況についての認識があったのであり、それ故に、病人の看護をする役割を引き受けたのである。

秀吉が病に倒れている場所は病院ではなく、安宿であり、従って、そこには病院の様に病人の看護を引き受ける看護婦はいない。従って、たか子は寅次郎と同様に、自らの行為の遂行によって役割を創造したのである。確かに社会には病人を看護する看護婦と言う仕事、あるいは役割が有るが、それは病院と言う交換システム内での役割であり、病院と言う交換システムによって分節された役割である。たか子が居る様な安宿で、看護婦の様な役割を果たす事は、そうした役割が社会の中には存在しないが故に、役割の創造にほかならない。役割の創造とは、寅次郎の場合もそう

であるが、或る事柄を主体的に引き受ける事であり、一般的にそうである様に、交換システム等の如き既に社会の中に有り、社会を構成することの一端を担っている既存の役割を、社会から与えられる事ではなくて、自らの行為の中で何らかの役割を創造していくことである。もっと平たい表現を使うならば、自分がやらなければならない様に社会から義務付けられているわけでもない事を行なう事が役割の創造である。

それではたか子は何故そうした行為を為したのであろうか。秀吉の病状が一段落した次の日の朝、寅次郎とたか子は近くの寺の境内で、初めて互いに名乗り合い、たか子は失恋した事を寅次郎に話す。その場面を映画の中から引用してみよう。

たか子が寺の近くの店で買物をして、待っている寅次郎に何か持って行く。

「かあさんは甘い物もいけるのか」と言いながら、たか子が買った物を受け取る。

「そういやあ、まだ名前も聞いてなかったなあ」と寅次郎。

「本当だ」とたか子は笑う。

「俺ね、東京は葛飾柴又の車寅次郎ってんだよ」

「立派な名前」

「そうかねえ」

「私、淡路島で生まれて、あと四国やら関西やらいろんな所で育ったの。坂井たか子と申します」

「たか子ちゃんか、ちょっと何か呼びにくいなあ。かあさんでいいだろう」

「そうねえ、寅さんでも、父さんでも似た様なもんだしねえ」

と二人は歩きながら話す。

たか子は本堂でお賽銭をあげて、何かお祈りをする。寅次郎は後で待っている。

たか子が祈り終わって近付いて来ると、
「長い間、何拝んでたんだい」
「お礼、言ったのよ。坊やの命が助かったから。五百円玉はりこんでしもうた」
「そういえば、礼も言ってなかったな。有難う。赤の他人のおれ達にこんなにまでしてくれて」
「だって、父さんだって坊やと赤の他人なんでしょ」
「でもよう、母さんはたまたま隣の部屋に泊まっただけで、こんな騒ぎに巻き込まれちまって、悪かったな」
「本当言うとね、父さん、昨日の晩、男と二人で泊まるはずだったの。向こうに用事が出来て断って来たんで、勝手にしろって、喧嘩してしもうて、もうどうにでもなれって、旅館の窓から崖に飛び込んで死んでしまおうか、そんな事思うてたの」
「死ぬなんて言葉、簡単に口にださない方がいいよ。母さんの様な綺麗な人との約束破る様な奴はどうせろくな男じゃあねえや」
「そうね、でも今は本当にあの男が来なくて良かった、そう思ってるの。だって、もしあいつが来てたら、父さん達が隣の部屋で何してようと関係無く、下らない時間を過ごしてたに違いないもんねえ」
「そういうもんかねえ」
「チアノーゼって言うのかなあ、あの子の唇が紫色になって、目がとろんとして、名前呼んでも返事しなくなったでしょ。私、恐ろしくて、身体が震えて来て、何していいか分からない、ただ部屋の隅で両手合わせて、神様、仏様、キリスト様、どうかこの子の命をお助け下さい、この子の命が助かったら、私、酒でも煙草でも男でも断ちますから、そうお祈りしてたの」
「ほほおー、偶然だなあ、俺もね、女断ちますからって、そうお祈りしてたんだよ」

七一

二人は笑う。

「お祈りが通じたかも知れんね、ほら、明け方、あの子が喉乾いたって言うたでしょ、唇見たら赤い色がさしてて、あー、良かった、助かった、そう思うた時、あの子の命だけじゃなくて、自分の命まで取り返した様な、胸の奥から冷たくて、綺麗な水が音をたててあふれて来る様な、そんな幸せな気持ちがしてね」とたか子は涙ぐむ。

「有難うよ、秀吉のおとっつぁんも、きっと草葉の陰で涙流してよろこんでるよ。有難う」

この二人の会話から、たか子が失恋して、昨夜死のうと思ってた事が分かる。たか子は交換システムによって分節された人間的繋がりではない人間的繋がり、つまりテニエスの言うゲマインシャフト的な、あるいは交換システムの外の人間相互の繋がりを欲していたと言えるだろう。つまり、たか子は失恋によって自分を失っていたのであり、自分とは誰か、自分とはなんなのかが見えなくなっていたのであり、そうした自分を発見してくれる人を求めていたと言って良い。

ミードは次の様に述べている。

「身振り会話の場合には、『I』も『me』もない。全動作がまだ遂行されていなくて、身振りという領域で〔『I』や『me』発生の〕準備がはじまっているにすぎない。さて、人が自分自身のなかに他者の態度を発生させると、それにともなって組織化された反応群が生じる。かれが自我意識を獲得するのは、組織化できるかぎりでの他者の態度を採用するかれの能力のお陰である。組織化された態度のセットを全部採用すると、かれは『me』を取得する。それが、かれの知っている自我である。かれがだれか他のメンバーにボールを投げられるのも、チームの他のメンバーたちがかれに寄せている要求のせいである。それが、かれの意識のなかで、かれに対して直接に存在している自我である。かれは、他者達の態度を〈念頭に〉もち、かれらの望むところを知り、かれ自身の動作の結果がどうなるかも知り、その状況にたいして責任を感じている。さて、こういう組織化された態度のセットの現存こそが、『I』としての人間

が反応していく『me』を構成する。ただし、その反応がどんなものかを、その人は知らない。他のだれも知らない。かれは、すばらしいプレーをするかもしれないし、エラーかもしれない。状況――かれの直接的経験に立ち現われてくる――への反応は不確定的で、それ〔反応〕が『I』を構成する。」（ミード『精神、自我、社会』）

またドイツの哲学者ヘーゲルは次の様に述べている。

「両人（自己と他者）は自然的定在という〔自己意識にとっては〕よそよそしい本質態のうちに定立せられた意識を撤廃する。言い換えると、両人はお互い自身を撤廃するから、そこで自分だけで存在しようと意志する両極としての両人も撤廃されてしまっている。しかし、これがために（承認と言う）交換の遊戯からは、互いに対立した限定をもった両極に分解するという必須の契機が消滅することになり、媒語はあるにはあっても、萎縮して死せる統一と化し、そうしてこの統一が死んだ両極に、ただ単に存在するにすぎないのであって対立しているのではない両極に分解していることになる。そこで両極が互いに他に自己をもどし与え、また自己を相手から受取りもどし、しかもこのことを意識を通じてなすのではなく、相互に他を物として没交渉に自由放免しているにすぎない。両人の為したことは抽象的な否定であって、意識の否定ではない、いったい意識というものは、撤廃する（アウフヘーベン）にしても、撤廃されたものを保存し維持するような具合に撤廃するものであり、こうして意識は自分の撤廃されたことをも越えて生きるものなのであるが、このような否定ではないのである。」（ヘーゲル『精神現象学』）

ミードもヘーゲルも、他者の存在を媒介にして自己が成立することをこのように述べている。ヘーゲルの『精神現象学』から引用した文章はかなり難解であるが、要するに、自分と他者が互いに自分を相手に承認せしめるための争い、相手に自己を承認させる欲望が自己意識の本質であり、個としての自覚は、他者との関わりの中で、他者との闘争において為されるのであると言う意味である。

他者とは言わば自分を映す鏡の様なものであり、他者が自分を見る、その眼差しを介して自分が見えて来るのであ

る。あるいは他者の自分への振る舞いの中に、あるいはその振る舞いを通して自分に対して自分が見えて来るのであり、そのようにして失われていた自分を見いだす事が出来るのである。

すなわち人間は自分の事を承認してくれる相手が必要なのであり、特にたか子の様に失恋の痛手を癒すためには、そうした人間的な関わりが必要なのである。たか子はそうした相手を無自覚の内に求めていたのであり、そうした事が偶然隣りの部屋に泊まっていた寅次郎を助ける行動に出さしめたのである。つまりたか子は自分を映す鏡としての誰かを求めていたのであり、それが寅次郎であった。先の映画からの引用にも有る様に、たか子は寅次郎の中に自分を承認してくれる相手を見いだしたのである。

人間は何らかの交換システムに属しており、交換システムによって与えられた役割を遂行しているのであるが、自分の交換システムの中での役割についての認識、あるいは自覚は、交換システムに映し出された自分によって見えて来る。つまり、交換システムを構成している人間相互の繋がり、あるいは行為連関を介して自分の役割についての自覚、自己評価が可能になるのであるが、この場合は私的な自分についての自覚に関してであるが故に、たか子は交換システム外での人間的な繋がりを求めたのである。

次に第八作目の「寅次郎恋歌」を通して、幸福観について考えてみよう。マドンナは池内淳子。

博の母親が危篤だと言う報せを聞いて、さくらと博は故郷の岡山県高橋に向かう。とらやに電話して、そのことを知った寅次郎も博の実家に行き、葬儀に参列するが、そこでも一悶着有る。皆が帰った後、寅次郎は博の父を慰めるために博の父の家にとどまる。そこで博の父は寅次郎に人間の幸福とは何かについて聞かせる。

諏訪家、茶の間（夜）

庭一面に咲きこぼれたりんどうの花。

縁側に座布団を出して食後の一服を楽しんでいる飈一郎。
寅は食卓に向かってまだ酒を飲みながら歌などうたっている。
寅「花つむのべに陽は落ちて、チャカスッチャカチャンチャン――」
飈一郎「寅次郎君」
寅「はいはい」
飈一郎「旅のくらしは楽しいかね」
寅「ええ、そりゃあ楽しゅうございますよ。何てったって、こりゃ、やめられませんね、ええ……」
飈一郎「……」
寅「ああ、そのことなんですけどね、先生お一人じゃ淋しいから、ずっと傍にいてさし上げてえと、そう思ってたんですけどね、なにしろ旅先なもんで、いろいろと用事がたまっちゃいましてね、できたら明日あたり失礼させていただきてえなと、こう思ってたんですけどね」
飈一郎「そうか……そりゃあ残念だね」
寅「すいません、本当に」
飈一郎「いやいや、いろいろ世話になってありがとう」
寅「いえとんでもねえよ、それより、先生も一人じゃ大変だよな、言っちゃなんだけどさ、先生の息子さん達は少し冷てえんじゃねえかな、俺、今度東京へ行ったらね、博の奴にバシッと言ってやるわ」
飈一郎「(苦笑しながら)で、君はこれからどこへ行くつもりかね」
寅「ええ……どこへってねえ、これから寒くなるから、南の方へ行くってことになるんじゃないすか、はは、気楽なもんだよね、それに女房子供はいねえから、身軽でいいですよ……アーアーアー、誰か故郷を……」

七五

颱一郎「寅次郎君」
寅　「はいはい」
颱一郎「今、君は女房も子供もいないから身軽だと言ったね」
寅　「ええ、そうですね、思わアざる、ペンペンポンポンペンペンポンポン」
颱一郎「ねえ君、その歌をやめなさい」
寅　「はい」
颱一郎「……そう、あれは、もう十年も昔のことだがね……わたしは信州の安曇野という所に旅をしたんだ」
寅　「へェー、先生も旅をしたことがあるんですか」
颱一郎「うん、バスに乗り遅れて田舎の畑道を一人で歩いているうちに日が暮れちまってね、暗い夜道を心細く歩いていると」
寅　「キツネの話でしょ、ね、ベッピンに化けたキツネが背中から肩叩いて、旦那ふりむいてよ、なんて」
颱一郎「いや、そんな話じゃないんだ」
寅　「へえ……」
颱一郎「ポツンと一軒の農家がたってるんだ……りんどうの花が庭一杯に咲いてね、あけっ放した縁側から、灯りのついた茶の間で、家族が食事をしているのが見える。まだ食事に来ない子供がいるんだろう。母親が大きな声でその子供の名前を呼ぶのが聞こえる」
寅　「……」
颱一郎「わたしゃね、今でもその情景を、ありありと思い出すことが出来る。庭一面に咲いた、りんどうの花、あかあかと灯りのついた茶の間、にぎやかに食事をする家族たち……わたしはその時、それが……それが本当

の人間の生活ってもんじゃないかと……ふと、そう思ったら、急に涙が出てきちゃったね……」

寅　「……」

颱一郎「人間は絶対に一人じゃ生きていけない……さからっちゃいかん……人間は、人間の運命にさからっちゃいかん……そこに早く気がつかんと、不幸な一生を送ることになる」

寅　「……」

颱一郎「分かるかね、寅次郎君……分かるね」

寅　「へい、分かります、ようく分かります」

寅、鼻をすすりあげる。

黙って、立ち上り、出てゆく颱一郎。

庭一面に、月光を浴びて咲いているりんどうの花——。

寅次郎は颱一郎の話に感じいって、柴又に帰る。柴又ではとらやの近所に六波羅貴子（池内淳子）が引っ越して来て、喫茶店を経営している。とらやの人々は寅次郎が帰ったので慌てて　何とか貴子に会わせない様にする。その夜、寅次郎は颱一郎からの話を皆に披露する。

茶の間（夜）

博も来て、一同夕食の膳をかこんでいる。寅が熱心にしゃべっている。

寅　「たとえば、庭一杯にりんどうの花咲き乱れる農家の茶の間、あかあかと灯りがついて、そこに父親と母親と、そして子供達がいて賑やかに夕食を食べている、これが……これが本当の人間の生活だと思わないか

七七

い、君」

博　「(戸惑いながら) ええ、まァ……その通りですね」

さくら「お兄ちゃん、本当よ、とってもいいこと言うわね」

寅　「俺もいろいろ……考えるところがあってね、うん」

つね「ちょいと悪いけどね、親子で晩御飯食べてるだけのことで何でそんなに感心するんだい」

竜造「そうよ、どこでもやってるじゃねえか、それくらいのことは」

さくら、博、顔を見合わせる。

寅　「嫌だなァ、ただ食べてるんじゃないんだよ、庭先にりんどうの花が咲いて、だよ」

つね「りんどうならうちにも咲いてるよ」

寅　「だからさ、電気があかあかとともってよ」

竜造「夜になりゃ電気はつけるだろ、どこでも」

寅　「ああ、分かってねえな、これだから教養がない人間は困るんだ、なァ博」

博　「(閉口しながら) そうですね……つまり、兄さんの言いたい事は、平凡な人間の営みの中にこそ幸福がある、とでもいうのかな」

寅　「そう」

博　「言ってみれば人間には人間の定められた生活がある、ということじゃないんですか」

寅　「そうそう」

竜造「ほう」

つね「へえ」

さくら、クスクス笑っている。

寅　「(しみじみと) 考えてみりゃあ俺も長い間人間の運命にさからって来たもんな」

竜造　「そんなにさからっちゃいねえと思うけどな」

寅　「さからってますよ、十六歳の折からずーっとさからってるよ、俺は」

とらやの人達の努力にも拘らず、寅次郎は貴子に会う。そして貴子の一人息子と一緒に遊んだりして、貴子の気を引こうとする。そして貴子の家の縁側で、寅次郎は貴子にまたあの飈一郎から聞いたりんどうの花の話をする。

貴子の家

寅　「きれいな月ですね」

貴子　「寅さんは旅先でこんなお月様をみながら柴又の事を思い出すことがあるんでしょうね」

寅　「ええ、そりゃあありますよ」

貴子　「いいわね、旅の暮しって」

寅　「そりゃ好きで選んだ道だから今さらグチも言いませんが、傍目ほど楽なもんじゃありませんよ」

貴子　「そう」

寅　「そうですとも」

貴子　「たとえばどんなこと」

寅　「そうですね、たとえば日暮れ方畑のあぜ道を歩いたりしてるときにね、りんどうの花が庭いっぱいに咲きこぼれているような農家の茶の間に電灯が明々とついていてそこで親子が楽しく飯食ってる姿なんぞを垣根

七九

ごしに見たりしますとね、アーこれが本当の人間の生活ってもんじゃねえかと、そう思ったりしましてね」

貴子　「わかるわ、淋しいでしょうね、そんなときは」

寅　「ええ、ま、仕方ねえから行きあたりばったりの呑み屋に入って無愛想な娘相手に一杯ひっかけましてね、駅前かなんかの商人宿の薄いせんべい布団にくるまって寝ちまうんでさァ、眠られぬ耳に夜汽車がボーッときこえたりしましてね、……朝、下駄がカラコロ鳴る音に目を醒ましましてね、ふと今俺はどこにいるんだろうなァ、ああ、そうか、四国の高知だったかと……そんな時ですねふと今ごろ柴又のさくらやおばちゃんたちは、おつけの実をきざんでるのかと思ったりするんですよ」

貴子　「いいわねえ、すてきねえ、私もそんな旅がしてみたいわ」

（『男はつらいよ4』ちくま文庫）

衛星放送で放送された「寅さん映画の世界　4」の中で、この場面が紹介されて、山田洋次監督が解説するのであるが、特に寅次郎がとらやで、博の父である飈一郎から聞かされた話を披露する場面で、どうしてとらやで寅次郎が話すと、皆がその話に感銘しないのかを問題にする。

「ここでしみじみと、聞いた志村さん（博の父）の話を寅が得意になって、とらやで繰り返すと全然通じないと言うかなあ、話の有り難味がねえ。あの可笑しさってのは何なんでしょうねえ。だから、寅は心を打たれたんでしょうねえ、その話にね。その話のテーマが寅には伝わっていないって事なのかなあ」

そして、最後の貴子の家の縁側での場面について、

「その時に寅がその話の意味が初めて分かったって事なのかなあ。うんと時間を置いて、しかも自分が或る深い心の傷を抱いた時に、あの志村さんの話を思い出して、それが彼にとっても腑に落ちたって事なんでしょうかねえ。こ

の、つまり志村さんの家でやっかいになっいる寅が、調子良く酒なんか呑んでいる時には、深く傷ついた志村さんの思いが伝わっていなかったって事でしょうかねえ。この一人暮らしの志村さんが家族と言うものについて語っている。寅は、そのまさに彼が共有しているところの賑やかな団欒の場でそれを言うから、何も伝わらないって事でしょうねえ、きっと」

この「寅次郎恋歌」では、幸福と言う事、あるいは本当の人間の生活と言う事がテーマである。博の父の所に居候していて、「女房子供が居ないから気楽だ」と言う寅次郎に、博の父が幸福とは何かと言う事について寅次郎に説教し、その話に感銘した寅次郎がとらやに帰って、皆の前で博の父から聞いた話を披露するが、おじちゃんとおばちゃんは、その話にピンと来ない。しかし、最後の場面で貴子の家の縁側で、貴子にその話をすると、貴子は感銘を受ける、と言う事で、この博の父の話が通奏低音の様にこの物語の底を貫いている。

幸福とは何か、あるいは幸福な状態とはどのような状態を言うのか、と言う問題は、幸福と言う事がかなり主観的なものであるが故に、難しい問題である。他人が見て不幸である様に思える状態であっても、本人は幸福であるかも知れないし、また誰が見ても幸福な状態の様に思われる場合でも本人は全然幸福ではない、と言った事もありえるからである。この映画の中で、博の父飈一郎は、寅次郎に、言わば幸福の条件について語ったのであろうか。

飈一郎が言う様に、人間は一人では生きられないからと言って、それでは家族を持てば幸福になれると言う様に簡単にはいかないであろう。しかし、飈一郎には寅次郎が一人者である事にこだわっている様に思えたのであろう。現に寅次郎は、自分は一人者で、女房子供はいないから気楽で良い、と言っている。最初に述べた様に、(「映画『男はつらいよ』の哲学的分析」『徳山大学論叢第四十八号』) 誰でも寅次郎の様な何のしがらみも無い気楽な生活に憧れるのであるが、しかし寅次郎の様な生き方を実際にしようとは思わないであろうし、そうした生き方の中に幸せが有るとも思わないだろう。飈一郎は、独り者であることを貫いている様に思える寅次郎に、真の人間の生き方とはそのよ

うなものではない、と言う事を教えたかったのであろう。

家族を持つと言う事が幸福の十分条件ではないけれども、しかし幸福の必要条件であろう。先に述べた様に、幸福とは主観的な状態であるが故に、幸福で有るための社会的な条件とは何かと言った事を考える事は困難である。つまり幸福であるための社会的条件が揃えば、誰でも皆幸福になれると言う事でもない。しかし、家族を持つと言う事が幸福であるための必要条件である、と言う事は確かであろう。

家族とは社会の最も小さい単位であると言う事は周知の事実であるが、家族は先に述べた恋愛的行為連関の継続の結果生じた最小の共同体である。それは、男女の一体感によって形成された共同体であるが故に、相互の繋がりは他の共同体に比べると強い物がある。つまり家族と言う共同体において、共同体内の構成員相互の理解は他の共同体と比べると深い。社会とは行為連関である、と言う社会についての第二の定義については既に述べたのであるが、家族と言う共同体内での行為連関は社会を成り立たしめている行為連関の中でも最も親密な行為連関であろう。そこにはいかなる相互間の隔たりも無いし、また遠慮も無い。そうした所から、家族外社会では相互の遠慮のために生じない様々なコンフリクトが生ずるのであるが、それでもそうした親密さの行為連関としての家族は幸福の必要条件であろう。

家族の社会的役割の一つに生殖と子孫の生産、それに教育と言う事が有るが、家族内での性的行為、つまり夫婦間の性的行為が、社会の中で正当化された唯一の性的行為であり、それ以外の場所で、あるいはそれ以外の関係性に基づく性的行為は反倫理的とみなされ、或る場合には犯罪とみなされる場合も有る。しかし、家族の存在理由、あるいはその目的は正当化された性的行為に有るのでもなく、また子供を生産することに有るのでもなく、そうしたことは親密さの行為連関を形成するための手段であり、そうした事を通して、家族の構成員は他の社会単位には無い親密さを形成するのである。

博の父が寅次郎に話した、信州の安曇野で見た農家の家族の情景は、そうした家族的な親密さの象徴的な表現であったのであろう。そうした家族を形成することが人間の運命であると博の父は寅次郎に言う。人間の運命と言った表現は少し大げさな言葉の響きを持つが、一人暮らしを続けている寅次郎に対して、そうした多少インパクトの強い表現が適切であると、博の父は思ったのであろう。結婚して家族を持つと言う事が人間の運命である、と言う事は、そもそも社会と言うものは人間相互の行為連関であり、何らかの形で人間は相互の行為連関を形成せざるを得ない、と言う事であり、しかもそうした人間の行為連関の中で家族と言う親密な行為連関を形成することが、人間の自然な姿であると言う意味であろう。

社会は、既に述べた様に、人間の行為連関であり、人間は常に何らかの行為連関を為し、また何らかの行為連関の中に居るのであるが、そうした行為連関の中で、行為連関の相関者との繋がりの在り方が問題であり、例えば交換システム内での行為連関の相関者とは、或る程度の距離を保っており、相互に何らかの遠慮が必要である。そうした中で、社会生活を営む場合に、行為連関の相関者との間の距離が最小限度に少ない、そうした関わりを持つ事が必要である。寅次郎の場合には、さくらとかおじちゃんとかおばちゃん等とそうした関係を形成しているのであるが、彼等は寅次郎にとって妹であり、伯父であり、伯母である訳で、さくらにとって寅次郎よりも夫の博の方と親密な関係を形成しており、おじちゃんもおばちゃんと長年そうした関係を形成しており、その意味で寅次郎にはそうした親密性を形成する相手は居ないと言う事になる。

それは博の父も同様であり、博の父はこの物語の最初で、長年の連合いを失った事になっている。そのように長年の連合いを失った博の父が言う言葉だからこそ、寅次郎に大きな感銘を与えたのであり、寅次郎がとらやに帰って、とらやの家族の中で、博の父から得た話をしても、寅次郎が話す相手はみんなそれぞれそうした親密な行為連関を形成しており、そして寅次郎はそうした親密さの真っ只中で、その話をするのであるから、その話を聞く方は何の感銘

も受けず、そんな事は当たり前の事だと言う事になるのである。つまり、寅次郎は明々と電灯のついた茶の間で、あるいは親密さを形成している共同体の真っ只中でその話をするから、そんなことは当たり前じゃないか、と言う事になるのである。

最後に近い場面で、寅次郎は貴子に、彼女の家の縁側でその話をするのであるが、貴子も連合いを三年前に亡くしており、一人手で子供を育てている訳であり、それ故に、博の父から聞いた話を寅次郎が受け売りでする話に大きな感銘を受けるのである。

博の父は、人間は一人では生きられない、そこに早く気づかないと不幸な一生を送る事になる、と言う。それでは、幸福の条件や不幸の条件は、あるいはその状態は今まで述べてきた行為の合理性と非合理性との関連で言えば、どのようになるのであろうか。つまり、幸福とか不幸は合理的なものなのか、非合理的なものなのか、と言う問題をこの章の最後に述べよう。

幸福とか不幸は、前にも述べた様に、かなり主観的な要素が入っているので、一般的には扱いにくい問題である。社会学ではこうした問題について扱っている学者はいないであろうし、また哲学者でもあまりいない様だ。特に最近の哲学書の中で、幸福とは何かについて述べている書物は殆ど無いと言える。哲学者の三木清はそのことを嘆いて次の様に述べている。

「今日の人間は幸福について殆ど考えないやうである。試みに近年現はれた倫理学書、とりわけ我が国で書かれた倫理の本を開いて見たまへ。只の一箇所も幸福の問題を取り扱っていない書物を発見することは諸君にとって甚だ容易であらう。かやうな書物を倫理の本と信じてよいのかどうか、その著者を倫理学者と認めるべきであるのかどうか、私にはわからない。疑ひなく確かなことは、過去のすべての時代においてつねに幸福が倫理の中心問題であったといふことである。ギリシアの古典的な倫理学がさうであったし、ストアの厳粛主義の如きも幸福のために節欲を説いた

のであり、キリスト教においても、アウグスティヌスやパスカルなどは、人間はどこまでも幸福を求めるといふ事実を根本として彼等の宗教論や倫理学を出立したのである。幸福について考へないことは今日の人間の特徴である。現代における倫理の混乱は種々に論じられているが、倫理の本から幸福論が喪失したといふことはこの混乱を代表する事実である。新たに幸福論が設定されるまでは倫理の混乱は救われないであろう。」（三木清「人生論ノート」『三木清全集第一巻』）

今までの記述では、合理的行為は交換システムに即した行為であり、非合理的行為は交換システムを介さない行為である、と言う事であった。そしてこの章と前の章では、非合理的行為を主に扱ったのであるが、幸福の条件としての、その社会的基盤、あるいはそれに基づく行為は、合理的なものであろうか、それとも非合理的なものであろうか。

既に述べた様に、幸福である状態や不幸である状態は何かと言う問題は、その人間の主観がかなり多く介在するから、困難であるが、一応その一般的社会的条件についてのみ述べるにとどめよう。まず、或る人間が幸福であるためには、その人が何らかの交換システムに内属して、交換システムを媒介した行為連関を形成すると言う事が必要であろう。つまり、生活の糧を得る事が必要である。いかなる交換システムにも帰属しないで、全てを自給自足でやると言う事は、過去の時代ではありえたかも知れないが、現代ではそのようなことは必要無いし、また無意味であろう。だから、人間は何らかの形で社会化されなければならない。つまり、社会から諸々の行為の仕方を学んで、そのことによって自立していくと言う事が必要であり、そのために学校教育が不可欠である。

それがまず現代社会に生きる我々にとって幸福であるための第一の条件である。しかし、それだけでは、つまり生活の糧を得るだけでは、幸福な状態を獲得することは出来ないであろう。ここで扱っている「寅次郎恋歌」の中で博の父が寅次郎に語った様に、何らかの交換システムに帰属している事を大前提にして、その上で親密な行為連関の相関者を見いだす事、つまり家族を形成することが、第二に必要な条件であろう。

すなわち、幸福であることの社会的条件は、交換システムと言う合理的機構に属し、しかも親密さと言う行為連関の形成と言う非合理的な、つまり交換システム外での、あるいは交換システムを越えた行為連関の形成と言う事が必要である。またもっと取り扱う領域を広げれば、人々が属している社会が秩序付けられた状態であることが必要である。その社会が混乱状態にあるとか、あるいは何処かの国と戦争状態にあるとかと言った社会の状態だと、この二つの条件が揃っていても、その社会に属する人は幸福な状態を得る事は出来ないであろう。

それでは、幸福な状態であると言う事は、合理的であるのか、非合理的であるのか、と言う最後の問いかけをしよう。結論は、幸福であるためには、合理的な要素が必要であるけれども、人間が自分は幸福だなと思う事は、合理的領域には属さない事柄ではないだろうか。つまり、そうした客観的な条件が充たされていても、自分が幸福であるのか、不幸であるのかを感ずるのは、それぞれの人間の主観であるが故に、幸福であることの条件を全て合理的要素でもって結論づける事は困難なことではないだろうか。ただ幸福である事の社会的条件はそのように何らかの交換システムに帰属して、そして家族と言う親密な行為連関を形成することである、と言う事が出来るが、そうした客観的条件が充たされると、全ての人間は幸福に為れると言う訳にはいかない。そうした客観的条件が充たされても不幸な人も居れば、客観的条件が充たされなくても幸福な人も居るだろう。だから、幸福、不幸の条件はそうした客観的な条件に基づき、しかもそうした条件を受け入れる人間の主観性と言う非合理的な要素が大きく左右する。つまり、人間の時間性が問題となると言えよう。すなわち、その人間が社会の中で何を目指して行為するか、と言う事にかかっているのではないだろうか。

【注】映画「男はつらいよ」からの引用で、ちくま文庫版の脚本集からの引用と、直接ビデオから起こしたものとが有る。
またそれ以外の文献からの引用は、本文の中に示してある。